
真・恋姫†無双～乙女繚乱☆平成仮面ライダーと三国志演義～

雀神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜乙女繚乱☆平成仮面ライダーと三国志演義〜

【Nコード】

N9630I

【作者名】

雀神

【あらすじ】

9つの仮面ライダーの世界…

真・恋姫†無双の世界…

今まで何の接点もなかったその2つの世界が今、一つになろうとしている！！

そしてそれに乗じて2つの世界を我が物にしようとする謎の組織が動き始めた…

そして謎の仮面ライダー《ディバイド》が現れ、2つの世界の命運を賭けた最大の戦いが待ち受ける！！

果たして世界は救えるのか？
そして謎の仮面ライダーの正体は？
さあ、新たなる外史を刮目せよ！！
世界を救い、悪を断ち切れ！！

第零席 《2人の男 重なり合う世界》（前書き）

.....

——ここは全ての外史が漂う空間：

それぞれバランスを保ちながら時が進んでいる…

………だが、

今そのバランスが崩れようとしている……

一つは9つの仮面ライダーの世界……

そしてもう一つは————

第零席 《2人の男 重なり合う世界》

——とある仮面ライダーの世界——

「? ? ?」

「はあ…はあ…はあ…」

ダッダッダ…

一人の青年が走っていた…“何かから追われるよう”にして…

〔青年〕

「クソッ！何でこんなことに…」

青年は走りながら呟いた…

〔青年〕

「本来、“重なり合うはずのない世界達”が“一つの世界になろうとしている”！！これは絶対に止めなければ！！」

そう青年が走りながら呟いていると、

「? ? ?」

「そうはさせません」

〔青年〕

「! ! ! ! !」

突如青年の前に現れた男はそう言う右手を上げる仕草をした。すると…

「???」

「グギャー」

〔青年〕

「?!…………くっ!」

突如現れた“巨大な蟹”が青年に向かって襲いかかってきた。青年は現れた巨大蟹の攻撃を避けると…

〔青年〕

「何故だ! 何故お前達は邪魔をする!? このままだと“この世界もろとも”“消滅”してしまうんだぞ!!!」

と男に問いかけた

〔男〕

「それこそが私達の望み…外史を消滅させ、私達の世界を創りあげるのだ!!!」

〔青年〕

「何!」

〔男〕

「そのために…アナタは目障りです。死んでください…」

スッ!

〔巨大蟹2〕

「ギャアアアーーーー」

〔巨大蟹3〕

「グギャーーーーー」

〔青年〕

「くっ！」

男がまた右手を挙げるとさらに2体の巨大蟹が現れた。

〔男〕

「これでお終いです…行け!!」

〔巨大蟹達〕

「「グギャーーーーー」」

三体の巨大蟹達が一斉に襲いかかってきた!!!

だが…

〔青年〕

「俺も死ぬワケには行かない！」

と言うと三体の攻撃をジャンプして避けるとそのまま…

〔青年〕

「変身！」

『カメンライド・デイバイド！』

青年はデイバイドライバーとカードを取り出すと仮面ライダー《デ
イバイド》に変身した。

〔デイバイド〕

「……………」

デイバイドは一枚のカードを取り出すとデイバイドライバーにカ
ードを入れた。

『アタックライド・インビジブル』

ガガガガ

電子音がするとデイバイドはその場から姿を消した…

〔男〕

「逃がしましたか…」

デイバイドが消え去った後男は…

〔男〕

「しかし、奴はこの計画を必ず潰しに来るでしょう…その時は…フ
ッ」

男は不適な笑いを浮かべると巨大蟹と一緒に消えて行った：

第零席 《2人の男 重なり合う世界》（後書き）

こんにちは！当作品の作者、雀神です。

真・恋姫†無双〜乙女繚乱☆平成仮面ライダーと三国志演義〜を読んでいたいただきありがとうございます。

いや〜いきなり怪しい男とオリジナル仮面ライダー《ディバイド》が出てきましたね〜。

この物語は9つの仮面ライダーの世界と真・恋姫†無双をディケイド：士達のように世界を回って行くのではなく、真・恋姫†無双の蜀ルートを主体としたものを作り上げていきたいと思いました。

まだまだ未熟者ですが、どうか飽きずに読んでいて下さい。

感想、アドバイス、質問等ドシドシお書き下さい、宜しく願います。

《次回予告》

一刀、劉備が率いる劉備軍が進軍していると空から青年が落ちてきた。そして、突如として現れた妖に苦戦を強いられる劉備軍。すると青年が…

次回！！

第壱席 《その青年、世界を救わんとすること》

世界を救い、悪を断ち切れ！！

第壹席 《その青年、世界を救わんとすること》（前書き）

——世界と世界の間——

〔青年〕

「くっ！此処に来る前のダメージが…」

1人の青年が流れの中で漂っていた…

〔青年〕

「くそ…も…う…意識…が…」

〔?..?..?〕

「……………」

そんな青年を見据える人影がひとつ

第壹席

《その青年、世界を救わんとすること》

「真・恋姫無双の世界」

……

……

……

…

〔二刀〕

「ああ…なんか平和だな」

馬に乗りながら北郷一刀は呟いた。そこに…

〔劉備〕

「ご主人様…のんびりし過ぎだよ」

〔関羽〕

「そうです!!ご主人様。もう少し主としての威厳を出してください!!」

〔二刀〕

「でもな…そんな事言われてもな…」

〔張飛〕

「愛紗、言っても無駄なのだ…お兄ちゃんに威厳なんてないのだ」

とっ3人の仲間達が言った。
てか張飛！！ハッキリ言い過ぎだぞ？！

〔二刀〕

「う…鈴々に言われてしまった…」と、落ちこむ一刀…あら…心折れちゃったね…こりゃ！

〔劉備〕

「ご、ご主人様！！元氣出して！確かにご主人様は威厳とか力とかないし、頼りないところばかりだけど、それでも私達のご主人様なんだから」

グサツ！グサツ！グサツ！

〔二刀〕

「ぐはっ！」

…さらに追い討ちを掛けられた北郷一刀はそのまま天国へと旅立った……

真・恋姫†無双〜乙女繚乱☆平成仮面ライダーと三国志演義〜〔完〕

………

………

…

〔二刀〕

「って、終わらすな…！！！！！！」

うお!?! 悪霊!! 安らかに成仏して下さい…
チーン…

〔二刀〕

「いや、悪霊でも幽霊でもないから!! 第一死んでないし!! まだ第壹席始まったばかりなのに終わらすな!!」

あ、そう? じゃあ話戻すね (笑)

…閑話休題…

〔二刀〕

「(笑) じゃね!!」

〔関羽〕

「ひっ!?! ご、ご主人様!?! いきなりどうしたのですか!?!」

〔二刀〕

「え…あ、いや…独り言// 気にしないで!!」

〔関羽〕

「?!!?…そう…ですか…分かりました…何かあったら言って下さいよ?」

〔二刀〕

「う、うん…分かったよ愛紗//」

〔劉備〕

「ホントにビックリしたよ……あれ??」

〔二刀〕

「ん? どうした桃香?」

〔劉備〕

「うん…あれ…」

〔二刀〕

「どれ?」

劉備が指差した方向は真っ青な空…おとといはものすごい大雨だった
が今日はとても良い天気だった
劉備が指したのはくま? のような形をした雲…

〔張飛〕

「あ! くま!」

〔愛紗〕

「? あれか? 私は猫に見えるが…」

〔張飛〕

「いや…ぜーったいくまなのだ!!」

〔関羽〕

「いゝや、猫だ!!」

〔張飛〕

「くゝま! !」

〔関羽〕

「猫!」

〔張飛〕

「くま!」

あゝもうキリがない!

〔二刀〕

「まあまあ二人とも…で? あの雲がどうしたの?」

〔劉備〕

「う…うん…見間違えかもしれないけど、今あの雲の近くで“人影のようなもの”を見たの…」

…

…

…

…

…

…

はあ?

〔二刀〕

「……………」

〔関羽〕

「……………」

〔張飛〕

「……………」

あまりにも突拍子な劉備の発言に言い争っていた関羽と張飛も劉備の方をみて固まっている。

〔劉備〕

「あ、いや…見間違えかも知れないから！！き、気にしないで」

〔二刀〕

「……………」

〔劉備〕

「う…ご主人様がいじめる」

今にも泣き出しそうな劉備

〔二刀〕

「い、いや…苛めるとかじゃなくてな…」

一刀が弁解の言葉を言おうとした瞬間

〔関羽〕

「ご主人様！！」

〔張飛〕

「お兄ちゃん!!」

ほぼ同時に義姉妹が一刀を呼び止めた

〔関羽〕

「あ、あれを…」

関羽が指差した先は、先ほどの劉備が指差したのと同じ空……だがそこには本来“有り得ないもの”があった……

二刀

「あれは……
“人”
！？」

〔劉備〕

「ええ！？」

そう、其処には……空には“人”がいたのだ！！
いでこちらに落下している！！
しかも物凄い勢

〔劉備〕

「ご、ご、ご、ご主人様！？！？ど、ど、ど、どうしよう！？！？」

慌てふためく劉備

兵士たちも状況が分かったのか動揺が出始めている

〔関羽〕

「落ちて着いて下さい桃香様!!」

〔張飛〕

「そうなのだ!! お姉ちゃんが慌てたら、兵士たちがもっと動揺するのだ!!」

〔二刀〕

「まずは、あの人を助ける方法を…」

一刀達が空から落ちてくる人物を助けようと考えていると…

〔? ? ?〕

『キュアーーーー!!』

〔二同〕

「」「」「!!!!」

けたたましい音が聞こえたと思ったら、巨大な“炎をまとった赤色の鳥”が空から姿を現した。

〔二刀〕

「今度は何なんだ?!?!」

〔劉備〕

「朱い…鳥？燃えてるし、普通の鳥にしてはかなり大きいね…」

〔二刀〕

「桃香…あれ、怖くないの？」

兵士達は突如現れた巨大な鳥に怯えて慌てふためいている…
中には妖かしと言ったり、この世の終わりだと言っている兵士もいる…

関羽、張飛は兵士を落ち着かせるために号令をかけている
まあ本人達も十分慌てているのだが…

〔劉備〕

「うん…なんて言うか…あの鳥は大丈夫だと思うの…」

〔二刀〕

「大丈夫って？」

〔劉備〕

「うん…なんか…こう、襲ってくる感じがないみたいなの…」

そう言った劉備の言葉に一刀は改めて鳥を見ると…確かに襲いかかるといった仕草を見せてはいない…それどころか、劉備達とは別の方向を見ていた…

〔二刀〕

「まさか…」

一刀は鳥が見ている方向に目をやると…さっきの落ちてくる青年の方に向いていた。すると鳥が青年に向かって進み出した…
青年は気絶しているのか指ひとつ動かさない…

〔二刀〕

「まずい！！…桃香！！今すぐ兵に弓矢であの鳥を攻撃するように言って！！！」

〔劉備〕

「！？！？…なんで？ご主人様？」

〔二刀〕

「あの鳥はあの人を襲うつもりだ！！！」

一刀の指差した方向を見た劉備は

〔劉備〕

「でもご主人様！！あの鳥の羽ばたきで起こる風で、矢なんか役に立たないよ！！！」

〔二刀〕

「でもどうすれば…」

そんな事を言っている間に朱い鳥は青年のすぐ近くまで来ていた。

〔二刀〕

「…っ！！！」

もうダメかと思った……

だが朱い鳥は、青年を襲うどころか背中に乗せ、ゆっくりと一刀達の近くの場所に降りてきた

〔二刀〕

「なんだ…たすけるために…」

〔劉備〕

「あの人に近づいていったんだね♪ご主人様」

〔二刀〕

「そうみたいだ…おっと!! あの人はい！」

ダッ！

そう言う一刀は駆け出した

〔劉備〕

「あ！待って〜ご主人様〜」

劉備も一刀の後ろから追いかけてくる

生憎、関羽と張飛、あと兵士たちはパニック状態だったので、朱い鳥が青年を助け近くに降りた事も、一刀と劉備がその元へ駆け出した事も知らない…

そう…ひとり離れたところから見ていた人間(?)を除いては…

〔? ? ? ?〕

「くっ!…あのまま死んでいればいいものを…」

男はさっきの光景を目にした後、驚くどころか苦虫を嚙んだような表情を見せ呟いた…

「???」

「……………まあ、いいでしょう…死んでくれなかったのは残念でしたが、結果オーライです。なにせ劉備軍は混乱してまともに攻撃できない…そしてオマケに《第2のターゲット》自ら軍から出てくれました」

男はそう言うのと笑いながら付け加え、その場から消えた…

——待ってなさい…《北郷一刀》…………——

……………

……………

……………

…

一刀と劉備は軍から一里半離れた場所にやって来た

「朱い鳥？」

『……………』

其処には、先ほどの朱い巨大な鳥が鎮座していた…
そして鎮座する鳥の前に青年が仰向けになって倒れていた

〔二刀〕

「はあ…はあ…はあ……………だい…じょうぶ、はあ…なのか?…」

全力で走ってきた一刀は肩で息をしながら青年に駆け寄った
その後ろから劉備も寄ってきた

〔劉備〕

「はあ…ご、ご主人様…はあ…速すぎ…はあ…」

〔二刀〕

「うん…ゴメン…桃香」

〔劉備〕

「ううん…ご主人様が謝る必要ないよ…それよりも」

そう言って劉備は倒れている青年を見る

〔二刀〕

「うん!…特に目立った傷害はないみたいだ」

コクっ！

劉備は頷く

そうすると安心したのか、先ほどから鎮座していた朱い巨大な鳥はその大きな翼を広げはじめた

その仕草に一刀は鳥にお礼を言おうとして顔を上げた
そして不意に鳥と目が合う

——我が名は、朱雀——

すると一刀の頭に直接声が聞こえてきた

〔二刀〕

「え…」

——また会おう…この世界の救世主…その男と一緒に——

〔二刀〕

「それは…どういう——」

一刀が最後まで答える前に、朱雀は翼を羽ばたかせ、空へと飛び去っていった

〔二刀〕

「な…なんだったんだ…『救世主』って一体…」

〔劉備〕

「ご主人様！？どうしたの？ボーっとしちゃって…」

〔二刀〕

「桃香…今の声…」

〔劉備〕

「声？…私はご主人様の声しか聞こえてないけど…」

〔二刀〕

「え…じゃあ今のって…」

〔劉備〕

「そんな事よりご主人様！！早くこの人を」

〔二刀〕

「あ、ああ…分かった」

どうやら朱雀の声（というかテレパシー的なもの）は一刀にしか聞こえなかったようだ

そして劉備の言われたように青年に目を戻す

青年はこの世界では“有り得ない”白と黒を基調とした服に黒いズボンをはいていた

〔劉備〕

「何だか見ない格好だね…あ、腰にさしてある武器も変な形…」

劉備が言ったのは青年の腰の辺りにある剣。

サーベル状で、鐔の代わりに何かを入れるような出っ張りがある…

〔二刀〕

「とにかく意識があるか確かめよう…すいませーん起きて下さい」

一刀は青年の肩をもって体を揺する

〔青年〕

「う…」

〔二刀〕

「よかったゝ生きてはいるみたいだ」

〔劉備〕

「ホントによかったね♪ご主人様！……あ！早く愛紗ちゃん達のところに戻らないと！」

〔二刀〕

「うん、そうだね。じゃあ急いで運ぼう」

〔青年〕

「う…う…ん…」

〔劉備〕

「あ、ご主人様。この人起きそうだよ！」

〔青年〕

「う…ん…」

パチッ！

〔青年〕

「あれ？ここは…」

（自分はどうなったんだ？突然痛みだして気づいたら…）

〔???〕

「あの…大丈夫ですか？」

〔青年〕

「!!!!!!」

――
一刀は青年が目覚めると声をかけた

〔二刀〕

「あの～大丈夫ですか？」

〔青年〕

「!!!!!!」

青年は最初は驚いてたものの、直ぐに落ち着き、

〔青年〕

「君…たちは……？」

〔二刀〕

「俺の名前は北郷一刀。そしてこっちは僕の仲間、劉備です」

〔劉備〕

「こんにちは♪え～と…お兄さんのお名前を聞かせてもらってもいいですか？」

「???」

「俺? おれは…《杉崎 宏太》だ…ところで俺はどうしていたんだ

「？」

そう言って杉崎は冷静に質問してきた

〔二刀〕

「はい…実は…」

一刀は杉崎が空から落ちてきたこと、そして朱い巨大な鳥が現れて杉崎を助けたことを話した

〔劉備〕

「ほんとにビックリしたんですよ！一事はどうなることかと…」

〔宏太〕

「……朱い…鳥…」

劉備の言葉を聞きながら杉崎はぶつぶつと呟いていた……
すると…

〔兵士〕

「ギャアアアア…！！！！！」

〔三人〕

「「「！！！！！！」」」

突如悲鳴が聞こえそっちの方を見ると…劉備軍が“謎の怪物”に襲われていた!!

〔劉備〕

「なに…あれ…」

〔二刀〕

「分からない…分からないけど早く戻らないと！」

〔劉備〕

「そうだね…愛紗ちゃん達のことにも心配だし」

そう言って2人が戻ろうとしたとき…

〔化け蟹〕

「キシャアアアア！」

〔二刀〕

「なっ！」

〔劉備〕

「ご、ご主人様！」

突如2人の前に“巨大な蟹”が現れた

〔二刀〕

「くっ！」

〔化け蟹〕

「キシャアアアア！」

化け蟹が一刀に攻撃してきた！

〔劉備〕

「ご主人様！！！」

そのとき

ブシャアアア

〔化け蟹〕

「ギャアアアアア」

〔二刀・劉備〕
「へ？」

気が付くと化け蟹が悲鳴をあげていると思ったら、化け蟹の巨大なはさみが斬られており、すぐ近くに自信の得物をもった杉崎の姿があった

〔宏太〕
「たくっ！おいしくなさそうな蟹だぜ！！」

そう言うと杉崎は一刀達の方を向き、

〔宏太〕
「ちょっと離れていてくれ！」

〔劉備〕
「え！？でも…」

〔二刀〕
「杉崎さんも危ないんじゃない？」

〔宏太〕
「いいから！あと俺の事は宏太でいいから」

そう言うと宏太はポケットから“一枚のカード”を取り出した。そして自身の得物“ディバイドライバー”にカードをセットした。

『カメンライド』

電子音が聞こえたかったと思うと宏太はセットした場所をデイバイドライバーに押し込んだ

『デイバイド！』

すると、宏太の回りに甲冑のようなものが装着され：

〔デイバイド〕

「ふうゝ…俺、参上！！」

《仮面ライダーデイバイド》に変身した！

〔二刀〕

「なっ！！！！………」

〔劉備〕

「す、杉崎さんが！！！！………」

その姿は、黄色とグレーを基準とした色で頭部から黒い四角い物体が飛び出している。

〔化け蟹〕

「ギョア!?!」

突然姿を変えた宏太にたじろく化け蟹

〔ディバイド〕

「まさか…こんなにも早く敵と対峙することになるとは……しかし、ゆっくりとはできない…一気に倒す!!」

すると腕についているカード入れから一枚のカードを抜き取り、ディバイドライバーにセットする。

『アタックライド・バスター』

すると何処からともなく巨大な銃、《バスターキャノン》が現れた。

〔二刀・劉備〕

「!!!!!!」

〔化け蟹〕

「ギョア!?!」

「ディバイド」

「短い時間だったけど、Good—bye…」

カチ！

ドカーン！！

化け蟹は一瞬で《撃破》された…

「二刀」

「なっ…なっ…なっ！？」

「劉備」

「え……い、いま……」

今の光景を見て唖然とする2人の前にスッとディバイドが現れ…

「ディバイド」

「なあ？…あそこで襲われている人達はあなた達の仲間か？」

「二刀」

「え……あつ、はい…でも…」

「ディバイド」

「そうか…お前たちはゆっくり合流しろ！」

〔二刀〕

「え…」

『アタックライド・ターボアクセル』

ダッ！

そう言うとき、デイドライドはデイドライドバーに新たなカードを差し込み、ものすごい速さで軍の方へ走っていった

〔二刀〕

「な…」

――その頃、劉備軍――

〔兵士〕

「ぐわあああああ！」

ボタン！

〔ワーム1〕

「ギャアアアア!!」

「ワーム2」

「ギャアアアア!!」

「関羽」

「くっ!!…なんなんだこいつらは!!」

劉備軍本体は突如現れた《ワーム》達に襲われていた

「張飛」

「愛紗…こいつらうようよいなのだ!」

「関羽」

「う…おい!ご主人様達は見つかったか!」

「兵士」

「いえ…まだ…」

「関羽」

「あ…次から次へと!!…!!」

その時!

シュン！

〔ディバイド〕

「ふゝ…やっと着いた♪」

〔二同〕

「!!!!!!」

いきなり兵士たちとワーム軍団の間に人（？）が現れた

〔関羽〕

「今度はなんだ!?!」

「?!!?」

「やあやあ! 君たちを助けに来ました」

とそいつは兵士たちに向かって言った

〔関羽〕

「な……お主、何者だ!」

「?!!?」

「ん？……俺か？……本来なら名前を言わないが最初だから言うてやる！！俺は通りすがりの仮面ライダーデИБайдだ！！よく覚えておけ！！」

〔兵士〕

「か、かめんらいだー？」

〔張飛〕

「お前あたま大丈夫なのか？」

〔デИБайд〕

「大丈夫、大丈夫。俺は至って健康さ♪……願わくばちゃんと離れて貰える？」

〔関羽〕

「そんな訳の分からない奴に指図される覚えは無い！！」

〔デИБайд〕

「いいからいいから♪」

『カメンライド・ガタック』

すると、デИБайдは青い体をした仮面ライダー《ガタック》に変

身した。

〔二同〕

「なっ！！！！」

〔ワーム達〕

「「「ギシャアアアア」」」

〔D bガタツク〕

「フンッ！」

ババババババハ！！

変身すると両肩に装備してあるマシンガンでワーム達を攻撃した

ドカーン、ドカーン、ドカーン！！

〔ワーム〕

「ギャアアアア！！……」

〔ワーム達〕

「「「ギャアアアア！！」」」

三分の一倒した時に、何体かのワームが同時に襲いかかってきた
だがディバイドは冷静に：

〔D bガタツク〕

「そう慌てるな」

『フォームライド・スタックビートル』

ガガガガ！！

ドカーン、ドカーン。

装甲が吹っ飛び、吹っ飛んだ装甲で爆死するワーム

装甲が弾け、ライダーフォームになったディバイドは

〔D bガタツク〕

「一気に倒してやるぜ！！」

『ファイナルアタックライド・ガ、ガ、ガ、ガタツク』

するとディバイドは肩に装備されてある二本の剣スタックセイバーを持つと、その二本の剣を合わせ巨大なハサミ型の武器にして残りのワームに突進していった

「ワーム達」

「「ギシャアアアア！」」

デИБイドが動いたと同時にワーム達も動く…だが

「Dｂガタツク」

「残らずその命、神に返しなさい……って違うか！！」

ザシユ！ザシユ！

ドカーン、ドカーン

デИБイドが《ライダーカッティング》で向かってきたワーム達を爆死させていった…

第巻席 《その青年、世界を救わんとすること》（後書き）

こんにちは〜作者の雀神と

〔宏太〕

「ディバイドこと杉崎宏太です!!」

いや〜長い!! 長かった!! 色々と長かった!!

〔宏太〕

「そうだな〜内容が長かったのと時間がなく…でもお前が―」

さて、ここで出てきました杉崎宏太!! これがディバイドに変身する本作品の主人公的な存在です。

〔宏太〕

「てめ〜普通に流すんじゃない!!」

はいはい…うるさいのはほつといて、ディバイドの分析をしたいと思いま〜す。

パチパチ…

〔宏太〕

「俺の力のほんの少しを教えてやるぜ!!」

《仮面ライダーデイバイド》

身長175cm

体重60kg

〔デイバイドライバー〕

…剣型の変身アイテム。鍰の部分にカードをセットする部分がある。

備考

…杉崎宏太が変身する仮面ライダー。

世界を救うためにデイバイドに変身するらしい。

過去については不明。

性格はお気楽。

〔カメンライドカード〕

…ほとんど全ての世界の《ライバル的存在》の仮面ライダーに変身することが出来る（時々メインキャラにも変身する）

〔ファイナルアタックライド・デイバイド〕

…デイバイドライバーから放つ斬撃が必殺技。
デイバイドストライク

その他諸々…

これがディバイドの力だぜ!!

〔宏太〕

「おいおい…説明不足な所とかないねか？」

ん……無いんじゃない？

〔宏太〕

「適当にすんな!!」

まあまあ、不満があれば感想等でいってくれれば答えます

〔宏太〕

「逃げんなよ!!」

そんなことより次回は？

次回予告

圧倒的な力をみせたディバイド：

だが一方、各地である《噂》が流れる：

そしてあるライダーが：

次回！！

第式席 《杉崎 劉備軍に参入する》

〔宏太〕

「悪を断ち切り、世界を救え！！…あれ？逆だっけ？」

第貳席 《杉崎 劉備軍に参入する》（前書き）

今回は、結構頑張りました（^| ^）v

長いですが、どうか最後まで見て下さい…

〔宏太〕

「ちわゝす！！」

宏太？　なんだ、何かようか？

〔宏太〕

「いや、この物語の主人公なんだからちょっと挨拶を……」

あ…そのことなんだけど…

〔宏太〕

「なんだよ。まさか今になって主人公交代とか言うなよ？」

………

〔宏太〕

「あれ？………なんでだまんだよ？」

はい！！ では、第弐席の始まりです

〔宏太〕

「悪を断ち切り、世界を救え！！……って、勝手に進めんなー！！」

第貳席 《杉崎 劉備軍に参入する》

「?..?..」

「ふっ……やはり倒されましたか…」

劉備軍達がよく見える場所にその男はいた

「?..?..」

「ですが……こんな事で死なれたら面白くないですからね……フフッ…」

不気味な笑いを浮かべ、その場から姿を消した——

………

………

………

…

——ところ変わって劉備軍本隊——

劉備軍本隊では、劉備、一刀と合流を果たした後、その場で一旦陣をしき、つかの間の間の休息を取っていた。

〔関羽〕

「そうか：杉崎殿は本隊が混乱している時に劉備様とご主人様に助けられ（落ちてきたのを助けたのは朱雀）、その後ご主人様が妖かしに襲われた所を怪しい術で助けて下さり、本隊が緑色の妖かしに襲われているところを凄い速度でご主人様達がいた場所から本隊へ走ってきてまたまた怪しい術で助けて下さったと言うわけか…」

〔二刀〕

「長い説明ご苦労様、愛紗」

〔関羽〕

「いえいえ、こんな事どうってことはありません。」

〔張飛〕

「それにしても杉崎のお兄ちゃんは凄いな…妖かしがどこーんて吹っ飛んじやったもん！」

〔劉備〕

「そうそう！杉崎さん、あれはどんな術なんですか！？」

〔宏太〕

「だから～宏太でいいって♪」

そして一刀ら5人は、天幕により今の状況を話し合っていた…

〔二刀〕

「ところで杉崎さん」

〔宏太〕

「だ〜から！呼び捨てで宏太で良いって！！それで馴れ馴れしくタメ口でいいから！！」

〔二刀〕

「で…でも、まだあったばかりですしお互いに互いにの事が分かってませんし…」

〔宏太〕

「そうか……まあいいや♪馴れたら呼んでくれ……それで？北郷、要件はなんだ？」

一瞬にして気楽な顔から真剣な顔に変わった影騎に、皆動揺はしたが、一刀が切り出した

〔二刀〕

「え、え〜と…杉崎さん、ズバリ聞きます。あなたは何者ですか？」

その言葉を聞いて一気に視線が宏太に集まる…

〔宏太〕

「うん：聞いてくると思ったよ……そうだな～：異世界：つまり一
刀、お前と俺は同類：それぞれ別の世界から来た人間だがな……」

〔二刀〕

「俺と同類！？じゃあ…杉崎さんも……」

〔宏太〕

「ああ…」

〔劉備〕

「え～～！！杉崎さんも！？」

〔関羽〕

「そうなのですか！？杉崎殿！！！！」

〔張飛〕

「すごいのだ～。だからあんなに不思議な力が使えたのか～」

喜んだり、驚いたりそれぞれの反応を見せる4人：

……

……

……

……

…その頃…
—魏—

「? ? ?」

「本当なの？秋蘭」

玉座に座って部下の報告に対して質問する金髪で、クルクルのおさげを2つしているしょうじ……

ボカツ！シュツ！！ザシュツ！！！！

ギャア……ピー……

暫くおまちください……

はあはあ…も、もとい女性がいた…

「? ? ?」

「はい…華琳様」

そして青い髪で、前髪で右目を覆っている女性が言う

「? ? ?」

「しかし…本当なのか？その…我ら“人間を抹殺しようとしている者達がいる”という噂は…」

黒髪の女性が言う

「???」

「まず間違いないでしょう。ここ最近、街での“行方不明者”が増えているもの」

そして最後に、猫耳のような頭巾を被った少女が言う

「???」

「これは魏だけではなく、大陸各地にも広まっている噂です。」

「???」

「なるほど……もういいわ、みんな下がって頂戴」

「3人」

「「「御意!」」」

カッカッカ…

キー、バタンツ!!

そして3人がいなくなった玉座で1人呟く“覇王”……

「???」

「フフッ……面白いわね…天はこの“曹操”の霸道の道に壁を出し

たか……だけど……」

そして、霸王“曹操”は……

〔曹操〕

「こっちにも策はあるのよ……そうよね……“鏡鎖”？」

すると、曹操の背後からヌツと現れた18ぐらいの青年が…

〔鏡鎖〕

「はい…華琳様…私が必ずや、魏からその根源を断ち切ってみせましょう…」

その手に“藍色の蠍の紋様が入ったカードデッキ”を持ちながら……

……

……

……

…

ところ変わって…

—呉—

此処では街の酒屋で机を挟んで2人の女性が椅子に向かい合わせて

座って酒を呑んでいた…

てか昼間ったら酒かよ!!

「???」

「ねえねえ祭、こんな噂知ってる？」

1人の女性はナイスバディで桃色のロングヘアーのスレンダーな女性

「???」

「つと、なんの噂ですか？雪蓮様」もう一人は年齢は高いが、こちらにも美しい女性

「???」

「知ってるかもしれないけど…誰かが人間を抹殺しようとしている”っていう噂」

「???」

「おお!!それなら聞いたことがありますぞ!…しかし、誰かの嘘ではないのかの？」

向かいに座っている高齢の女性の言った言葉に首を横に振るもう一人の女性

「? ? ?」

「初めはそう思ってたんだけど、冥琳がこの頃“行方不明者”が増えてるって聞いて、しかも呉だけじゃなくて大陸全土でも同じことがおきてるって」

「? ? ?」

「なんと!! では…」

「? ? ?」

「まだハッキリとはしてないんだけどね…でもそうじゃないかって私は思うの」

2人が話していると…

「? ? ?」

「あれ? 雪蓮様に祭様。こんな所で昼間っから酒ですか?」

見ると酒屋の前の道に大きな荷物を持ったこれまた18才ぐらいの青年が此方の方を見ていた

「? ? ?」

「あら? “虎閃”^{こーせん}じゃないの? どうしたの?」

〔虎閃〕

「見ての通りお使いですよ…それよりも“江東の麒麟児”と言われる呉の小霸王“孫策”様がこんな所で酒ですか…はあ」

そう言われた孫策は

〔孫策〕

「なによ、虎閃も呑む？」

〔虎閃〕

「いえ…遠慮しときます…あゝあと、冥琳様が探してましたよ…
…鬼の形相で…」

〔孫策〕

「え…そうなの？祭！急いで戻るわよ！！…」

〔???〕

「うむ！…これ主人、お代はあの者が出してくれるのでは」

ピュー

〔虎閃〕

「あ…ちよつと2人とも！！…たくっ！あれが我が主ね」

ぶつぶついいながら店の主人から領収書を受け取る

〔虎閃〕

「高ーーーー！！！！。あの2人どれだけ呑んだんだ！？」

荷物を置き、ポケットから財布を取りだそうとしたら一緒に入っていた“何か”が落ちた

〔虎閃〕

「おおっと！！！」

虎閃は直ぐにそれを拾い上げ再びポケットの中へ、それは“白色のパス”だった……………

……………

……………

……………

……………

……………

——洛陽——

タッタッタタ……

バタンツ

「???」

「月!」

いきなり扉を勢いよく開けて入ってきたのは眼鏡をかけた少女、その先に…

「???」

「ど、どうしたの? 詠ちゃん…そんな血相変えて…」

凄く大人しいそうな少女が部屋の掃除をしていた

「???」

「月、聞いた? あの噂…」

「???」

「噂?」

キョトンと首を傾げる少女

「???」

「そうよ…何でも僕達“人間を抹殺しようとしている奴らがいる”って!」

「???」

「その噂は本当なの? 詠ちゃん」

「?..?..?」

「さあね…でも…ここ洛陽でも“行方不明者”が続出しているらしいのよ…軍も搜索にあたっているけど、1人も見つかっていないわ…大陸各地でもこんな事が起きているらしいわ」

「?..?..?」

「ええ…どうしよう、詠ちゃん…」

「?..?..?」

「大丈夫、月は私が守るから!!それにこっちは恋と“アイツ”がいるんだから!!」

………

「?..?..?」

「ZZZZ……」

洛陽から少し離れた森の中である女性が気持ちよさそうに寝ていた
髪の色は朱色、そして髪の毛のてっぺんにチョンとアンテナのよう
に髪の毛が立っている

すると…

ガサガサ

近くの茂みから物音が…

パチッ

「? ? ? ?」

「……………」

女性は目を覚まし、物音のした方向を見る

ガサガサ…ガサガサ

物音が近付いてくる…

そして…

ガサリ!!

「? ? ? ?」

「“呂布” ……此処にいたのか…」

茂みから顔を出したその男は20代中ほどの人物だった

〔呂布〕

「……………“影騎”^{えいき}」？」

呂布と言われた女性が男に言う

〔影騎〕

「ああ…お前は気楽でいいよな」

〔呂布〕

「……………影騎……………恋…」

呂布が不思議な喋り方で影騎と呼んでいる男性に語りかける

〔影騎〕

「ん？あゝそうだったな……………えゝと……………んっ！！……………」

声を整えると

〔影騎〕

「恋……………童卓が集まれてさ」

〔呂布〕

「んっ……………」

呂布はそう言うのと立ち上がり…

〔呂布〕

「……………行こう……………」

〔影騎〕

「ああ……………」

2人は並んでその場を後にした……………

……………

……………

……………

…

—そして劉備軍天幕—

〔関羽〕

「それで？杉崎殿はどうするつもりなのだ？」

皆が落ち着いた頃に関羽が切り出した

〔宏太〕

「どうするとは？」

宏太が聞き返す

〔関羽〕

「これからの事だ……そこで提案なのだが…」

すると一拍置いてから

〔関羽〕

「杉崎殿!! 私達と一緒にこないか?」

〔宏太〕

「ああ…あれか…さっき劉備が言っていた…」

宏太は劉備から何故自分達が戦っているのを聞いていた

〔関羽〕

「そうだ…そなたの力があれば人々をもっと救える…」

〔張飛〕

「そうなのだ!」

すると張飛も話に加わってきた…

〔張飛〕

「鈴々達じゃ齒が立たなかったあの妖かしをお兄ちゃんは倒していたのだ!! お兄ちゃんがいれば………」

〔劉備〕

「そうです!! お願いします杉崎さん」

〔二刀〕

「俺からもお願いします杉崎さん!!」

劉備と一刀も加わり宏太に頼む
すると…宏太は

〔宏太〕

「や…ちよつとみんな? なに勘違いしてんの? 俺は元々そのつもり
何だよ?」

驚いた顔をして言う

〔二刀〕

「え? それじゃあ…」

みんな影騎を見る

〔宏太〕

「まあ…なんだ…その…俺は“この世界”に来てまだ日は浅い…
…だから…よろしく頼む」

頭を掻きながらめんどくさそうに言った

すると一刀が…

〔二刀〕

「大歓迎だよ！！なあ？みんな！」

一刀の言葉に他の人も

〔劉備〕

「もちろん！！！」

〔関羽〕

「ええ…元々そのつもりでしたし」

〔鈴々〕

「大賛成なのだ♪」

こうして杉崎 宏太は客将として、劉備軍に入った！！

〔劉備〕

「そうだ♪杉崎さん、あなたに私達の真名を預けてもいいですか？」

〔宏太〕

「え？真名？」

〔劉備〕

「はい♪真名っていうのは、家族や自分が認めた者以外にしか言っちゃいけない特別な名前なの。」

〔宏太〕

「へえ…そうか、あんた達が呼び合っていたあの名か！！」

〔劉備〕

「ええ、そうです」

〔関羽〕

「その名をむやみに認めていない者が言ってしまうと……」

〔宏太〕

「言ってしまうと…？」

ゴクリ

〔張飛〕

「首を斬られるぐらいなのだ！！もっと貴族の人間とかのだとそれ

だけじゃ済まないかも……」

〔宏太〕

「うわ……よかった言わなくて……」

〔劉備〕

「それで……預けてもいいですか？」

劉備は聞いた……

〔宏太〕

「だが……俺なんかがそんな神聖な名を口にしてもいいのか？ まだあったばかりなのに……」

〔関羽〕

「いいのです」

劉備にかわり今度は関羽が……

〔関羽〕

「私達はあなたが妖かしから守って下さった時にすでにあなたの実力を認めていますし、これから仲間になるのですから」

.....

少しの沈黙…そして―

〔宏太〕

「……………分かった…お前たちの真名、預かろう!!―その代わりちゃんと俺の事も宏太って言うんだぞ?」

〔劉備〕

「あ…はい!! 宏太さん!! 私のは真名は“桃香”です」

〔関羽〕

「私の真名は“愛紗”です宏太殿。」

〔張飛〕

「鈴々は“鈴々”なのだ♪宜しくね、宏太お兄ちゃん」

〔宏太〕

「桃香…愛紗…鈴々……………よし!! 共に頑張ろう」

〔桃香・愛紗・鈴々〕

「」「お……!!」「」

これでまた更に絆が深まった……

ある1人を除いては……

〔二刀〕

「俺って……影……薄いのかな………」

うつすら涙目の一刀君でした（∇、）

………

………

…

——とある研究所のようなところ——

そこに、あの男の姿があった…

『プルルルル……プルルルル

……ガチャ!』

〔? ? ? ?〕

「あ、もしもし? ……はい私です…」

誰かと電話をしているようだ……

〔? ? ? ?〕

「はい……はい……はい届きましたよ、いやゝありがとうございます……
す……“あなた”の助力があり、とても助かります……ええ……まだ
使いませんがね……いづれ使います……はい……はい……では“閣下
”……」

ガチャ

そう言って電話を切る男……

ん？閣下……どこかで聞いたことあるぞ……

すると謎の男は研究所の隅にある檻の前に立っていた

「? ? ?」

「ふう……“あの人”の助力で、面白い展開になりそうだ……フフ
ッ……」

檻の前で不気味に呟く男……すると……

「緑色した怪物？」

「ガアアアアア……!!!」

檻の中にいた“何か”が檻の中で暴れている

「? ? ?」

「おっと！元気があって良いですね♪あなたにはもう少ししたら仕事をやって貰いますからね…」

そう言って、檻の中の怪物？に語りかける…

「???」

「さてと、あの方から貰った“アイツ”は良い仕事をしてくれると期待して…：まず目の前の計画を実行に移しますか…：これだったら“あながしじん闇餓四神”様達もお喜びになるだろう…：フフフツ…：ハーハッハッハ！！」

研究所の中に男の笑い声が響く…

檻の中の怪物？の姿は“人間のようで”腰に“ベルトのようなもの”があり、“赤い、大きな目”をもっており、頭から“2本の角のように、触角のようなもの”が伸びていた…

…：…：そう…：“ライダー”である…

第弐席 《杉崎 劉備軍に参入する》（後書き）

はい！！　今回は、魏、呉、董卓軍のオリジナルキャラ、鏡鎖、虎閃、影騎の3人をお招きいたしました！
はい！拍手！！（^|^）／＼　　ゝゝゝゝゝゝゝゝ

〔鏡鎖〕

「……………」

〔虎閃〕

「初めまして。宜しくお願ひします！！」

〔影騎〕

「…まあ……宜しく頼む……」

はい！！それで、3人のこの物語での立場は…………ズバリ！！それぞれの勢力の“主人公”的存在です！！

〔宏太〕

「《大声》ちょっと待てー！！！！！！！！！！」

…………なんだよ……うるさいよ！！　宏太

〔宏太〕

「主人公ってなんだよ！！この物語の主人公は俺だろ！！」

まで…勘違いすんな…“的”って入ってるだろ？“的”って
早とちりすんじゃないよ！？

〔宏太〕

「じゃあ、この3人って何なんだ？」

はい、では説明します！！

んんっ！！

実は……

このまま宏太視点で話を進めていこうと最初は思っていたのですが
……

それぞれの勢力にオリキャラを配置し、そのキャラ視点の物語も作
っていこうと思ひまして、

この3人はその、魏、呉、董卓軍視点に見るときの主人公というわ
けです。

いまいち分からないという人は気軽に質問してきて下さい！！

これで分かったか？

〔宏太〕

「ふむふむ……よく分かったが、一つだけ疑問が…」

なんだ？

〔宏太〕

「蜀バージョンもあるのか？」

あるがどうした？

まだ誰かは発表してないがな…

〔宏太〕

「そうか……なあ？俺の出番、無くならないか？」

お前が真面目にやればちゃんとお前視点で作ってやる！！

〔宏太〕

「真面目にやります將軍（ゝ▽ゝ）」

よろしい！！

で、次は3人の能力について語りたいたのですが…文字数が限界になってしまいそうなので次話に描きたいと思います…

御迷惑を掛けてしまい、誠にすいません。

《3人の能力説明》（前書き）

〔宏太〕

「なんか……………」

〔鏡鎖〕

「……………」

〔虎閃〕

「??」

〔影騎〕

「……………」

〔宏太〕

「…………お前らの方が格好いい……………」

《3人の能力説明》

はい!!まさかの2話め突入です!!

〔宏太〕

「長すぎなんだよ!!」

しやあないだろ?説明してたんだから:

じゃあここでは3人の能力&変身するライダーについて話したいと思います

では最初は鏡鎖からです!!

〔鏡鎖〕

「……………すべては……………主の為に……………」

名前;鏡鎖^{きようさ}

性別;男

年齢;18才

身長;170cm

体重;55kg

性格;冷酷&忠実

所属..魏

武器;暗器(分銅、小刀、手裏剣、クナイ、隠し刀、毒幕などなど

…)

備考…

魏の隠密兵士。

暗器などの武器や、暗器以外にも、多才な武器も使用可能。
表に出ることは余りなく、いることを知らない兵も多数……

主に暗殺など、国に害をなすものを殺す仕事をしている…

春蘭は知らないが、秋蘭、華琳はたまに鏡鎖に会いにいたり、
命令を出したりする。

敵の兵士に化け、計略を起こすこともある。

変身するライダー；

本編でもあるように《仮面ライダー龍騎》のシステムを使っています。

名前や詳しいことについては追々話す事にします（勧の良い人は何か分かるかも……）

という訳で鏡鎖の能力でした～

続きまして、虎閃です！！

〔虎閃〕

「楽しくやりましょうよ♪」

名前；虎閃こーせん

性別；男

年齢；18才

身長..169cm

体重..46kg

性格..真面目

所属..呉

武器..双剣 かちようふうげつ 花鳥風月

備考..

呉軍、雪蓮の副将。

主に政務、雑用などをしている。

一度聞いた願いを直ぐには断れない優しすぎる人物（主に雪蓮の願いが多い）。

明るい性格で、街の住民からも人徳がある人間。

だが、街で悪事をする人間には容赦ない制裁を…（少し雪蓮に似ている…）

軍の中でも人徳があり、みんなから尊敬されている。

変身するライダー…本編でも分かるように《仮面ライダー電王》のシステムを使っていますが、自分のデンライナーは持っていない模様…

契約しているイマジンは出てきていませんが、“虎”のイマジンらしいです…

〔宏太〕

「そこバラしていいのかよ!?!」

まだ細かい所は言っていないけどな
まあいいだろ：

はい、と言うわけで虎閃の能力でした！！

……ではラスト、影騎で〜す！！

〔影騎〕

「…やっと俺の番か……………まあ、見てくれ」

名前…影騎^{えいき}

性別…男

年齢…25歳

身長…177cm

体重…60kg

性格…普通

所属…童卓軍

武器…箠手^{りゅうていおうが} 竜帝王牙

備考…

童卓軍、恋の副将。

恋の副将だが、タメ口（というか恋がタメ口で言って欲しいらしい
…）。気ままに自由人。政務なども中途半端だが人望はある。

基本的には素手だが、槍を使う時もある。なにを考えてるか分からない
ポーカーフェイス

変身するライダー…

影騎の変身するライダーは、本編では分からなかったですが、影騎は“平成仮面ライダー”の内の誰かに変身します。まあ、予想して下さい。

《3人の能力説明》（後書き）

ふゝ……やっと終わったゝ

〔宏太〕

「2話までいっちゃったからなゝ」

まあ…これでこの作品の見どころが分かって下さればいいなゝ

〔鏡鎖〕

「……………おい……………」

ん？なんだ鏡鎖？

〔鏡鎖〕

「……………早く次回予告しろ……………」

……………え？いやまだ話しても……………

ジャラー！！

→

鎖鎌を出す音

わ、分かった……

じゃ、じゃあ次回は？

〔虎閃〕

「宏太先輩が仲間に入った劉備軍は再び進軍！！」

〔影騎〕

「そして、謎の男とその組織の名前が明らかに……そして“闇餓四神”とは？……（淒く棒読み）」

〔宏太〕

「次回！！第参席《明かされる 謎の男の正体！！》」

〔鏡鎖〕

「……第弐席の感想も頼む……」

じゃあ………せいの！！

〔宏太・鏡鎖・虎閃・影騎〕

「「「世界を救い、悪を断ち切れ！！」
（若干2名が棒読み）」」

第参席 《明かされる 謎の男の正体》（前書き）

——とあるライダーの世界の山小屋——

〔青年〕

「う…」

ここに1人の青年が倒れていた

パチッ

〔青年〕

「う…う…ん…あれ？ここは…」

青年は目を覚まし起き上がった……すると……

「???」

「……………」

〔青年〕

「うわ!!……あんだ、いつの間に……………」

青年の前方に黒いコートとフードを被った男が現れた
すると男は

「???」

「時間がない……君の力が必要だ……」

〔青年〕

「俺の力って……うわ!! な、何っすかこれは!!……」

突然青年と男の間に“銀色のオーロラ”が現れ……

〔青年〕

「うわ!!」

銀色のオーロラは青年を飲み込み、そして消えた……

第参席 《明かされる 謎の男の正体》

宏太が劉備軍に入って一時間後……………

〔愛紗〕

「ご主人様、全部隊の準備整いました」

〔二刀〕

「うん、わかった。じゃあ愛紗、お願い！」

〔愛紗〕

「はい！！……………全軍出発！！」

ザッザッザ！！

充分に休息をとった劉備軍は、再び進軍を開始した――
……………

〔宏太〕

「……………ところでこれから何処に向かうんだ？」

馬に乗りながら宏太は4人に質問した

〔桃香〕

「はい、実はこちら辺で賊が出たという噂を耳にしまして……」

〔愛紗〕

「それを確認しに行くところなのです」

〔宏太〕

「なる程……」

〔二刀〕

「それよりも……宏太さんは馬に乗り慣れているんですか？」

必死に手綱を握り締め、落ちないように細心の注意をはらって乗っている一刀が質問した。

そうなのだ

宏太は何故か馬に乗り慣れて普通に会話をしているのだ

〔宏太〕

「ん？ ああゝ色々な《世界》を回っていてな、その時に教えて貰ったんだ」

〔桃香〕

「ふゝん…そう言えば、私たちがいる“此処”の事を《世界》って言っていましたけど、宏太さんの言うその《世界》というものはなんなんですか？」

その言葉に、愛紗と鈴々も宏太に質問する

〔愛紗〕

「そうです！…それに、あの妖かしは何なのですか？宏太殿！？」

〔鈴々〕

「あとあと、あのお兄ちゃんの姿は何だったのだ！？」

次々と質問してくる3人に宏太は……

〔宏太〕

「はあ…空が綺麗だな…」

〔桃香・愛紗・鈴々〕

「「真面目に聞いてください（なのだ）！！！」」

3人の声が鳴り響く

〔宏太〕

「あゝもう！！耳が壊れるよ…」

〔愛紗〕

「だ・れ・の・せ・い・で・す・か（怒）」

ギチギチギチ…

〔宏太〕

「イタタタタタ！！…イタいイタい！止めて、み、耳、千切れるから」（若干涙目）」

………

………

………

…

―その頃―

シューーン…

大陸のとある山の中に、突如として、“銀色のオーロラ”が現れた

……シューーン…

そして、直ぐ消えたかと思うとさっきまで何もなかったその場所に、あの青年が気絶して倒れていた。

近くには槍のような武器がある

すると…

「???」

「あら? こんな所に人が倒れているわ…」

近くを通りかかったのか、髪の色が紫色でとても綺麗な女性が、木々の間から青年が倒れている場所へと近づいて来た。

そして、青年に近寄ると青年の隣に座り込む

「???」

「おかーさん。どこー?」

何処からか、幼い子供の声が聞こえてきた。

「???」

「璃々、こっちよ」

その向こう側から小さな女の子が出てきた

「???」

「おかーさん、なにしてるの?」

女の子は手に、小さな可愛い花を持っていた

「?..?..」

「ん、ちょっとね、お兄さんが寝てたから、起こしてあげようともってね」

すると女の子も、とてとてと母親である女性のもとへ近づいてきた

「?..?..」

「ほんとだー…でも、こんなところでねちゃうとかぜひいちゃうよー?」

「?..?..」

「そうね…どうしましょう?」

母親が困った顔をしていると…

「?..?..」

「そうだー!! このおにいちゃん、おうちに連れて行こうよー」

女の子が両手を挙げて言った

「?..?..」

「お家に?」

母親が聞き返す

「?..?..?

「うん!!だってこのままねてたら、おにいちゃんかぜひいちゃうよー。それに、このままだったら熊にたべられちゃうよー」

そう言うと、女の子は母親の袖を引っ張り…

「?..?..?

「ねえーおかーさん…」

まるで新しい玩具をねだるような目で母親を見る女の子…

母親はしばし考えた後…

「?..?..?

「そうね…熊に襲われたりしたら大変だし、賊に狙われたらもつと大変だしね……分かったわ璃々、お家まで連れて行きましよう」

優しい笑顔を子供に見せながら母親は言った

「?..?..?

「わーい!!おかーさん、だーい好き!!」

女の子は母親に抱きついた

「? ? ? ?」

「こらこら璃々?これじゃあお兄さん運べないわよ?」

母親はクスクス笑いながら、しがみついた我が子に話しかける

「? ? ? ?」

「あ、そっか!」

すつと母親から離れる

それから親子は、青年を連れて山を降りていった…

……我が家〓“城”へと帰るために……

……

……

……

……

—ところ変わって劉備軍—

〔宏太〕

「いててて……」

ようやく愛紗の手から離れた宏太は、
真っ赤に腫れ上がった右耳に手を当てている

〔愛紗〕

「まったく……ちゃんと説明しないからですよ？」

その右隣に、当の犯人がやれやれといった表情でため息をついている

96

〔鈴々〕

「愛紗と鈴々たちを怒らせたお兄ちゃんが悪いのだ!!」

〔桃香〕

「そうですよ!!……さあ、話して下さい!!」

そう言って、鈴々と桃香が宏太に詰め寄る

〔宏太〕

「……………何の話だっけ？」

〔愛紗〕

「っ！……！」

〔二刀〕

「ま、待て愛紗！！」

今度は堰月刀を構え出した愛紗を一刀が止める

〔愛紗〕

「なぜ止めるのですご主人様！！我らを侮辱しているのと同じですよ！？」

愛紗の言葉に、桃香と鈴々も頷く

〔二刀〕

「気持ち分かるけども、仲間に手を出したら駄目だ！！」

〔愛紗〕

「しかし……」

〔二刀〕

「…愛紗、多分宏太さんだって言えない理由でもあるんだよ…だから

ら、ね？」

〔愛紗〕

「ご、ご主人様が…仰るのなら…」

と言って構えていた自身の得物を元の位置に戻す

〔二刀〕

「宏太さんもちゃんと………って話聞いてるんですか!？」

一刀が宏太の方を見ると、前方の方をずっと見ている

〔二刀〕

「宏太さ…」

〔宏太〕

「……煙が上がっている…」

〔二刀〕

「え…」

宏太が言った言葉に、全員が宏太の見ていた方向を見た

見ると、村のような所から煙が上がっている…

しかも一つではない…

《幾つも上がっているのだ》

〔二刀〕

「まさか…」

〔愛紗〕

「賊に襲われたのか!？」

〔二刀〕

「急ごう!!」

〔桃香〕

「はい!!」

〔愛紗〕

「御意!!」

〔鈴々〕

「分かったのだ!」

一刀達劉備軍は、煙の上がつている村の方へ急ぎ向かった……

……
……
……
……

〔二刀〕

「これは…」

一時して、劉備達は目的の村へと到着した…

…そこは、最近襲われたようであちらこちらにチロチロの火がついている

〔愛紗〕

「くっ!…」

〔鈴々〕

「ヒドいのだ…」

〔桃香〕

「まだ新しい……つい前に襲われたんだよ…」

愛紗と鈴々は怒りに体を震わせ、桃香は俯き、暗い顔をしている……

一刀も首を外に向けて目をギュッと瞑り、拳を震わせている……

——ガラガラ…ガッシャーン！——

……そんな中、一人だけ燃え尽きた瓦礫の中を賢明に退けている人物がいた……

〔宏太〕

「……っ…おりゃ！」

宏太である

宏太は燃えた瓦礫の山を素手で退かし、生存者が居ないかどうか確かめていたのだ！！

〔宏太〕

「おおおい！！落ち込んでる暇が会ったら僅かな希望を探して…いや、探し出して見ろよおお！！そんなんで人助けとか言ってるじゃねええええ！！」

恐ろしい闘気が混じった声を発しながら、此まで見せなかった真剣

な声を上げる宏太

宏太の声にはっとした劉備軍兵士達は、一斉に瓦礫を動かし始めた
……

……

……

…

〔兵士1〕

「おい！！誰か居ないか！！居たら返事をしろ！！」

〔兵士2〕

「おい、そこ釘出てるから気をつけろよ」

〔兵士3〕

「誰かこれ動かすの手伝ってくれ」

…ワイワイガヤガヤ…

兵士達が協力して作業する中劉備達もまた、生存者の搜索と兵士達の指示等をしていた…

〔愛紗〕

「おい、そこ崩れかかっているぞ！！気をつけろ！！」

〔鈴々〕

「鈴々はこっちをやるからお前達はあっちの方を頼むのだ！」

〔桃香〕

「あなた達はあそこ…あなた達は向こう…あなた達は私と一緒にあつちへ！！」

……………みんなが作業をしている中、一刀は宏太の下へと行った……………

〔二刀〕

「杉崎さん！！」

〔宏太〕

「ん？一刀か、どうした？何か見つかったのか？」

宏太は作業を止めず、顔だけを一刀に向けて喋っていた

〔二刀〕

「いえ……………そんなんじゃないですね…お礼が言いたくて……………」

〔宏太〕

「礼々？」

宏太は呆れたように返した

〔二刀〕

「はい…杉崎さんのお陰でみんなが絶望の闇から希望の光に進んでくれました。自分だけじゃあのままだったかもしれない…本当にありがとうございます。」

一刀は宏太に向かって頭を下げた…

〔宏太〕

「……はあ……」

それに対し宏太は溜め息を吐くと、作業を止め一刀の方に体ごと向けると

〔宏太〕

「あのな？一刀…俺はただきっかけを作ったに過ぎない…どう行動するかは自分達の自由だ…だがな一刀…これだけは言っておく……」

そう言うと、頭を上げた一刀の目を見ながら…

〔宏太〕

“いつでも希望を信じろ!!” …これは俺の教訓だ! お前も覚えろ! それを心に刻め! ……そしてさっさと指示出してこい!”

満面の笑顔で一刀に言った

〔二刀〕

「は、はい! …それじゃあ杉崎さん、ここは任せます…」

〔宏太〕

「おう! …ほら、行ってこい!”

タッタッタ…

一刀が行って1人黙々と作業を進める宏太

〔宏太〕

（うん! これであいつも自分のすべき事が分かっただろう）

こんな事を思っていると……

「う……うう……」

「うう……」

小さな声が2つ

〔宏太〕

「!!!!!!」

精神を集中させ、声の主達の場所を捜す…

〔???〕

「だ…だれか…」

〔???〕

「たすけてくださーい……」

〔宏太〕

「!!!!!!…そこか!!」

宏太はある瓦礫の中に手をかけ、思いっ切り持ち上げた

〔宏太〕

「おりややあ!!」

ドカーン!!

まるで爆弾でも落ちたかのような音を立てて落ちる瓦礫たち……

そして……

〔???〕

「コホッ!…コホッ!」

〔???〕

「ケホッ!…ケホッ!」

瓦礫の中に居たのは…小さな“女の子2人”だった…

〔宏太〕

「いた!…よし!!」

ガシッ!ガシッ!

宏太は2人を抱きかかえると、安全な場所まで非難した

〔愛紗〕

「宏太殿、さっきの音は…」

近くに居た愛紗が、大きな物音を聞きつけて何人かの兵士を連れてやって来た

〔宏太〕

「愛紗か！…生存者を発見した」

そう言って、抱えていた2人の少女を見せた

〔愛紗〕

「なんと！！ではあの音は…」

〔宏太〕

「そんな事より早く手当てしてやらないと……愛紗、至急この子達を桃香のところに連れてやってくれ」

〔愛紗〕

「分かりました」

そう言うとなの子2人を愛紗に手渡す……………

すると…

ドカーン！

〔化け蟹〕

「キシヤアアアアア！」

〔宏太・愛紗&兵士〕

「「なっ！」」

〔ワーム達〕

「「「グロロロ…」」」

なんと！！瓦礫の中から化け蟹が現れ、そして周りにワーム達も現れ、すっぽりと囲まれてしまった…

〔愛紗〕

「くっ！こんな時に…」

愛紗は少女達を抱えている為、得物を構えられない！！

——その頃、他のところでは——

〔鈴々〕

「またこいつら……」

〔二刀〕

「なんでいきなり……」

〔桃香〕

「どうしよう……みんなバラバラに……」

一刀達も又、いきなり現れたワーム達に取り囲まれていた……

〔ワーム達〕

「」「グロロロ……」

〔鈴々〕

「みんな！バラバラになってもこいつらには勝てないのだ！！みんな一カ所に集まるよ！！」

〔二刀〕

「杉崎さん達は大丈夫かな…」

……

……

……

……

…

「? ? ? ?」

「さあて…」

ある男が物影から様子を見ていた…

そう…初めにワーム達に襲われていた時に離れて見ていたあの男で
ある…

「? ? ? ?」

「うまく戦力を減らしましたが…ククツ…」

その男の姿をよく見ると、スーツにネクタイ、そしてシルクハット
というこの世界では“まず考えられない”格好をしていた。

「? ? ? ?」

「この状況……どうやって乗り切るのか……楽しみにしてますよ……」
“杉崎さん”」

…

…

…

…

side 宏太

〔宏太〕

「ちっ！」

ワームの群れと化け蟹を見ながら宏太はこんな事を思っていた…

〔宏太〕

（こいつら…あの時襲ってきた時と同じ組み合わせ………と言うことは、“あの世界”に居た時に襲った奴で間違いないな………この分だと、他の所にも……）

そして宏太はディバイドライバーを構えると

〔宏太〕

「他が気がかりだ、さっさと終わらせるぞ!!」

そしてポケットからカードを取り出す

〔宏太〕

「変身!!」

『カメンライド・デイバイド』

シャシャシャシャ…シャキーン!!

仮面ライダーデイバイドに変身した!!

〔デイバイド〕

「てめーら、性懲りもなく現れやがって…残らず掃除してやる!!」

するとデイバイドはデイバイドライバーの柄の部分を斜めにし、ガンモードにした…

そして腕に取り付けてあるカードフォルダからカードを取り出す

「デイバイド」

「俺を舐めたら……美味しくないぜ!!」

『カメンライド・ディエンド』

シューーン…シャキーン!!

今度はなんと、仮面ライダーディエンドに変身した!!

〔愛紗〕

「杉崎殿…本当にお主は一体…」

すると宏太が愛紗達の方に振り返った

〔宏太〕

「…………俺は…世界を救う“救世主”」

そう言うと、ワーム達の方に向き直る

そして、カードフォルダから数枚のカードを取り出すと次々とデ
バイドライバーにセットしていく…

〔Dbディエンド〕

「人数は多い方が良い…」

『カメンライド・カイザ』

『カメンライド・カリス』

『カメンライド・イブキ』

『カメンライド・ゼロノス、アルタイルフォーム』

電子音が鳴り響くと…

シャキーン！！

シャキーン！！

シャキーン！！

シャキーン！！

〔化け蟹&ワーム達〕

「「ギッ！」」

〔愛紗〕

「なっ！」

〔兵士〕

「これは…一体…」

“ 4人の仮面ライダー” が化け蟹とワーム達の前に出現した

〔カイザ〕

「……………」

〔カリス〕

「……………」

〔威吹鬼〕

「……………」

〔ゼロノスA〕

「……………」

〔宏太〕

「さあ…掃除の時間だ♪」

……………

……………

……………

：

side 一刀

〔鈴々〕

「わわっ！！」

〔二刀〕

「大丈夫か鈴々！？」

一刀達は窮地に立たされていた……
固まって行動していたが、数が数なのでじりじりと追い込まれていた……

鈴々はいたが、流石に1人では限界がある……
他の兵士では歯が立たないからである

〔二刀〕

「く……（早くみんなと合流しないと……）」

するとワームの一匹が一刀に襲い掛かってきた！！

〔ワーム〕

「ギシャアアアアア!!」

〔鈴々・桃香〕

「「!!!!!!」」

〔鈴々〕

「お兄ちゃん!!」

〔桃香〕

「ご主人様危ない!!」

鈴々と桃香が助けに行こうとしたが、他のワームに邪魔されて行けない!!

〔二刀〕

「鈴々!! 桃香!! ……くっ!!」

ワームとの差がドンドン縮まっていく

〔ワーム〕

「キシヤアアアアア!!」

〔二刀〕

（万事…休す…か…）

一刀が目を諦めたその時…！

シュツ！

〔ワーム〕

「ギャアアアアア！？」

ドカーン…！！

〔二刀〕

「……………え？」

突如、一刀を襲っていたワームが《何か》の攻撃を受けて爆死した…

その《何か》とは？

「カリス」

「……………」

「二刀」

「あれは…」

一刀の数メートル先にカリスアローを構えた“仮面ライダーカリス”がいた

「カリス」

「……………」

ギギギッ…

カリスが第2撃目を構え、そして…

「カリス」

「ふんっ！……………」

シュシュシュ！！

「ワーム1」

「ギャー!!」

「ワーム2」

「ギッ…」

「ワーム3」

「ギャアアアア!!!…」

ドカーン!!!ドカーン!!!ドカーン!!!

カリスアローの先から無数の矢が飛び出し、ワームを撃退した…

「鈴々」

「にやにや!?!」

「桃香」

「ど、どうなったの!?!」

鈴々と桃香の場所からはカリスの姿が見えなかったようで、何が起こったか分からないようだ…

「Dbディエンド」

「おゝい!! 一刀、桃香、鈴々!!」

そこへディエンドの姿をしたディバイドもとい、杉崎が走り寄ってきた

後ろに残りの3人の仮面ライダーもいる

〔二刀〕

「え…その声は…杉崎さん!？」

〔桃香〕

「え!?! 杉崎さん!？」

〔鈴々〕

「また変わってるのだ…」

走り寄ってくるディエンドの姿をしたディバイドに戸惑いながらも声を聞いて宏太と分かったら、3人とも安心したようだ…

〔二刀〕

「杉崎さん…この人達は――」

すると…

〔D bディエンド〕

「今すぐ全速力で逃げろ!!」

〔3人&兵士〕

「」「へっ?」「」

宏太の言った意味が分からず一瞬ポカーンとしていたが、次の瞬間
!!

ドカーン!!

〔big化け蟹〕

「コギヤアアアアア!!」

〔3人&兵士〕

「」「いゝ!!!!!!」

ディバイド達が来た方向から、この間のよりかなりでかい化け蟹が
現れた

〔D bディエンド〕

「行け！！あっちの方向に愛紗達もいる！！愛紗達と合流しろ！！」

ディエンドは自分の左側の方向を指差す

〔二刀〕

「分かりました…桃香、鈴々…みんな行くよ！！」

〔兵士達〕

「はっ！！」

〔桃香〕

「はい！！」

〔鈴々〕

「分かったのだ！！」

一刀達は全速力で宏太が指した方向へと走った…

……そして完全に一刀達が見えなくなると…

〔D b デイエンド〕

「……………よし！……………じゃあこっちもさっさと終わらせますか！！」

そう言うとb i g化け蟹に向き直り1枚のカードを取り出すと、ガンモードのデイバイドライバーにセットする

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイエンド！！』

デイバイドがデイバイドライバーを構えると、他のライダーも構え、そして：

〔b i g化け蟹〕

「ギッ…」

〔D b デイエンド〕

「覚えておきたまえ……………これが…デイバイドだ！！……………とても意味ないか…」

カチッ…

キューーン……………ズドーン！！

5つの銃口から一斉に強烈なエネルギー弾が発射される

〔big化け蟹〕

「ギャッ——」

ドカーン！！

化け蟹は木っ端微塵になった…

シュシュシュ…シューーン…

役目を終えたライダーは消え、宏太も変身を解いた…

〔宏太〕

「ふ…疲れた…」

変身を解いた宏太がそうつぶやくと、

〔宏太〕

「……早く合流するか……」

タッタッタ…

宏太はその場から立ち去った……

……

……

……

…

宏太が一刀達と合流すると、兵士から歓声が上がった

〔宏太〕

「な、なんだ？」

戸惑いを隠せない宏太。そこへ桃香が

〔桃香〕

「みんな宏太さんに感謝してるんですよ」

それに続いて今度は兵士の1人が

〔兵士〕

「凄いです將軍！！あんな化け物をやつつけられるなんて！！」

桃香から話を聞くと、初めの頃は何かの妖術使いと思っていたらしく、兵士は皆宏太の事が気に喰わなかったらしい…だが、宏太の言った一言で皆改心したらしく、このような大歓声を受けたらしい…そんな事で改心しなくても…と宏太本人は思っていたのだった……

……………その時!!

パチパチ

〔謎の男〕

「いやゝ、ブラボーブラボー」

〔宏太・他多数〕

「「「?!?!?!?!?!」」」

突然、宏太達の前にあのスーツ姿の男が拍手をしながら現れた

〔謎の男〕

「素晴らしい戦いを見せて頂き有難うございます…いやゝ手間を掛けたかいがありましたよ。」

と、微笑みなが近づいてくる

〔愛紗〕

「止まれ！！貴様…なに――」

スッ

一歩踏み出そうとした愛紗を手を出して止める宏太

そして…

〔宏太〕

「……貴様だな？この邑を襲ったのは……」

〔一同（謎の男以外）〕

「「「！！！！」」」

宏太が言った言葉に皆驚きを隠せない…
だが一方で謎の男はニヤニヤと笑っている

〔謎の男〕

「ほほう…その根拠はどこに？」

〔宏太〕

「なーに、簡単な事さ……この邑には倒れた建物や、焼けた家屋……そして大量の血の跡があった……だがな……」

そう言うと宏太は一拍置いて……

〔宏太〕

“死体が見あたらねえんだよ”……一体もな！！（少女2人以外）

〔二刀〕

「あ……！！……」

〔桃香〕

「そう言えば……」

宏太の言葉に皆納得する更に宏太は続ける

〔宏太〕

「残っていた血の量から見ても致死量を越えている……盗賊が襲ったとしても死体までは持って行かないだろう？……それに前は今さっき、“手間を掛けて良かった”と言った。つまり、この邑……そして俺達を襲ったのはお前だって事だ……」

一通り終えた宏太は謎の男をまた見直す

〔謎の男〕

「ククッ……クククッ……」

するとなぜか謎の男は不気味に笑っていた……そして…

〔謎の男〕

「ハーツハツハツハ…」

盛大笑ったかと思うと

〔謎の男〕

「あなたのその冷静な判断……最高に良いですね!! では…良いものを見せてもらった代わりに私のことを教えてあげましょう♪」

〔宏太〕

「何!？」

〔謎の男〕

「私は……“闇餓四神”様達が作り上げた“ヘル・ストーパー”の幹部……“クライス”!! 以後お見知り置きを…」

と言って、深々と頭を下げるクライス。

〔愛紗〕

「貴様…貴様達は何が目的だ!!」

愛紗が怒りを込めて質問する…
クライスが一拍置いて答える

〔クライス〕

「…………この……“世界を手に入れる”事ですよ!!」

〔愛紗〕

「なっ!」

この言葉に驚きを隠せない一同…

〔クライス〕

「おっと!喋りすぎましたかね……ではこれで失礼致しましょう…」

するとクライスの体がふわりと空中に浮き、その背後から“黒いオ
ーロラ”が現れた

〔クライス〕

「では杉崎さん、劉備軍のみなさん……そして“北郷一刀”くん…
…さようなら」

〔二刀〕

「！！！！なぜ俺の名前を…」

〔宏太〕

「おい！まて！」

シューーン…

黒いオーロラはクライスを取り込み、クライスと共に消えた――

………

………

………

…

――同刻――魏

〔鏡鎖〕

「……………！」

シュツ…トン

部屋にいた鏡鎖は何か天井に人の気配がし、素早くクナイを投げた

「???」

「さすが魏の影の武将…伊達ではありませんね」

〔鏡鎖〕

「…姿を表せ…」

すると天井のクナイを投げた場所から1人の男が姿を表した。

その男ではなんと“忍者”の格好をしており、顔に覆面をしている

「???」

「お初にお目にかかる…私の名は“妖羅”ようら ヘル・ストーパーの幹部の1人…」

〔鏡鎖〕

「…………ヘル・ストーパー…お前……《あいつ》の手下か……」

〔妖羅〕

「ほほう…なかなか感が宜しいようで……」

〔鏡鎖〕

「……ならば問答無用だ……」

シュッ

いつの間にか妖羅の背後に回り込み、小太刀で首を掻き切る！！

だが…

ゴトンッ

そこに倒れていたのは真っ二つになった木だった

〔鏡鎖〕

「……変わり身か……」

〔妖羅〕

「ハハハ…また今度会いましょう！！…ですが“ライダー”で、ですが…」

いつの間にか妖羅は消え、言葉を残すと気配も消えた――

〔鏡鎖〕

「……………」

1人になった鏡鎖は

〔鏡鎖〕

「……………動きだしたな………《シシオウ》……………」

と、呟き自室を後にした――

……………

……………

……………

……………

―同刻―呉

〔虎閃〕

「♪」

虎閃は街で買い物をしていた

〔少年〕

「ねえねえ？お兄さん…」

見ると虎閃の足下に5〜8才ぐらいの少年がいて、虎閃に話し掛けてきた

〔虎閃〕

「ん〜？どうしたのかな〜僕？」

虎閃はその場でしゃがみ込み、少年と同じぐらいの高さになると少年に問い返した

すると…

〔少年〕

「あのね………この世界………くれない？」

〔虎閃〕

「！！！！」

ダッ！

突如大人のような口調になり、その小さな体から想像もつかない恐るべき冷たいオーラを漂わせたその少年から一瞬で距離を取る虎閃……

〔少年〕

「おいおい………そんなに離れんなよ。」

大人の口調でからかいながらも冷たいオーラはそのまま……

〔虎閃〕

「貴様！！………何者だ！！」

自分の腰に下げている武器に手をかけながら言う虎閃

〔少年〕

「まあまあそんな慌てんなよ………俺はヘル・ストーパーの幹部の

1人“リース”。ま、よろしく♪」

にっこりと笑いながら言うリース

〔虎閃〕

「……………」

〔リース〕

「ああ…お前の事は言わなくて良いぜ、虎閃さんよ……あと“ライダー”って事も知ってる」

〔虎閃〕

「っ！……………」

カチャ

獲物に手を掛ける

〔リース〕

「おーっと！今日は争いに来たんじゃねえんだ…じゃあな虎閃さん♪」

タッタッタ

と言うとリリースは人混みの中へと入って行った

〔虎閃〕

「あ…待て！」

虎閃も直ぐに追おうとしたが、人混みの中あんな小さな子を見つけるのは無理な話で…あっさりと見失ってしまった

〔虎閃〕

「ヘル・ストーパー……」

1人となった虎閃はそう呟きながら買い物を再開した…

…

…

…

…

—同刻—洛陽

〔影騎〕

「……………」

影騎は洛陽近くの森の中に来ていた…

そこには綺麗な川が流れており、影騎はその川のほとりに立っていた

〔影騎〕

「……………」

特に何もする事なく川を見つめていた…

すると突然影騎が口を開き…

〔影騎〕

「……そろそろ出て来たらどうだ？」

ふとそんな事を言った…

すると…

〔青年〕

「……いつから気付いていましたか……？」

不意に影騎の背後の木の影から1人の青年が姿を表した

〔影騎〕

「……街にいた時からだ……」

青年に後ろを向けたまま答える

〔青年〕

「ほとんど最初からですか……細心の注意を図っていたんですけどね……」

〔影騎〕

「……其れよりも要件を言え……その為につけて来たんだろう？」

眉一つ動かさず質問する影騎

〔青年〕

「やれやれ……其処までお見通しですか……」

青年は参ったという表情を見せる

〔青年〕

「では…………まずは自己紹介から…………私の名は“ウォン・レイ”……ヘル・ストーパーの幹部の1人……………」

〔影騎〕

「……………」

ウォンの言葉にも驚きの表情を見せない

〔ウォン〕

「私共の目的は世界を手に入れる事…………その為に……………」

ウォンは一拍置くと

〔ウォン〕

「あなた達…この世界にいる“ライダー”達を倒す！！…………今日はその宣誓布告しに来ました……………」

ピクッ

かすかに影騎の眉が動く

「ウォン」

「では……私はこれで……また会いましょう…」

するとウォンの後ろにも黒いオーロラが現れ、ウォンを取り込み消えていった……

「影騎」

「……………」

影騎は一時絶ってからその場を後にした――

……………

……………

……………

…

―とある場所―

「???」

「……………」

「? ? ? ?」

「.....」

「? ? ? ?」

「.....」

「? ? ? ?」

「.....」

そこには円卓のテーブルがあり、4人の人物が囲むように一定の感覚で座っていた……

「? ? ? ?」

「……………それで? あいつらはそれぞれ、この世界のライダーに宣誓布告をしてきたのか?」

4人内の1人が話し掛ける

「? ? ? ?」

「……ああ……しかし……こんな事をしなくても直ぐに攻めれば良いものを……」

残りの内の1人がそういうと…また別の人物が…

「? ? ? ?」

「……………いや……………これで良い…」

するとさっきの人物が

「? ? ? ?」

「分からないな…あんたの考える事は……………」

やれやれといった表情を見せる

「? ? ? ?」

「……………」

残った人物は沈黙を保っている……

「? ? ? ?」

「とにかくだ…」

すると最初に発言した人物が

「?..?..?

「我々“ヘル・ストーパー”の行動を開始する……皆、気を抜くなよ……」

……

第参席 《明かされる 謎の男の正体》（後書き）

いやー長らくお待たせ致しました。

〔宏太〕

「……………なんか今回、当初の案とズレてなかったか？」

そうか？

〔宏太〕

「ぜってーそうだよ！！だって題名と内容なんか噛み合っていないし
！！！」

んー……………まあいいんじゃない？

〔宏太〕

「軽！！！」

そんな事より次回は？……………の前に皆様にお知らせがあります。

活動報告を見て下さった方は分かっていると思いますが…今回、こ

の小説の更新と同時にこの作品のガイドブック形式の小説を書きました♪

〔宏太〕

「え？お前そんなん書いてたの？」

ああ…良かったら見て下さいね！

さてさて次回は？

なんと待望の第1回、魏ルートの話を書こうと思っています！！

〔宏太〕

「え……もう……てか俺の出番無くな？」

ま、そう言うこった♪

じゃあ鏡鎖、後はよろしく

〔鏡鎖〕

「……………待望の第1回魏ルートのあらすじは……………魏の国に起きている“謎の事件”……………その調査に出た俺は“ライダー”が絡んでいと知り、探しに行く……………次回：魏✓第壱席…《鏡鎖 謎解きを開始する》……………なんだ？この題名……………世界を救い、悪を断ち切れ……………」

〔宏太〕

「感想よろしくな♪」

乞うご期待!!

魏✓第壹席 《鏡鎖 影の魏將軍》（前書き）

やっと出来ました！

……ってあれ？タイトル変わってる…

〔鏡鎖〕

「……………」

魏✓第壹席 《鏡鎖 影の魏將軍》

――

――

ここは魏――

霸王曹操が治めるこの土地は、堅く、隙間無い守りで人々は安心して暮らしている――

ガラガラ

タッタッタ…

〔中年男〕

「はあ…はあ…はあ…」

暗い路地を、1人の男が闇雲に走っていた…

タッタッタッタ…

〔中年男〕

「はあ…はあ………」

ガラガラ…

ガッシャーン！！

タッタッタッタツ…

路地に置いてある物を次々と壊して行きながら、男はしきりに辺りを見回していた

〔中年男〕

「はあ…はあ…はあ………」

まるで猛獣に追われているような形相でひたすら右、左とランダムに走っている

程なくして男は足を止め、辺りを見回していた後、ホッと一息すると勢いよくその場に腰を下ろした

〔中年男〕

「はあ…はあ………なんとか…巻いたようだな…」

笑みを浮かべながら男はそう言った

「???」

「…………逃げられると思ったか？」

〔中年男〕

「ひっ!!?」

突如声がしたかと思うと、男の頭上から、全身を黒い服で統一し、目つきがとても鋭い青年が現れた

〔中年男〕

「な…」

〔青年〕

「…俺からは逃げられないよ…………例えこの国から逃げ出してもな…」

とても冷たく、鋭い言葉の剣を男に突き刺す

〔中年男〕

「っ!!…………ち、ちくしょー!!こんな所で死ぬわけにはいか

ねーんだよ!!」

シャン!

すると中年男は懷から短剣を取り出した

〔中年男〕

「へ、へへ……悪く思うなよ兄ちゃん……て、てめえが悪いんだからなー!!」

ダッ!

短剣を構え青年に襲いかかる——だが、

シュン!

〔中年男〕

「な……き、消えた……」

〔青年〕

「……………こっちだ……」

〔中年男〕

「!!!」

ドン

バタッ

青年が消えたかと思うと、今度は中年男の後ろに移動しており、男が振り向く間もなく手刀をいれて男はそのまま気絶した。

〔青年〕

「……………」

そして青年は男を担ぎ上げ、その場を後にした――

――青年の名は鏡鎖――

……………

……………

……………

…

――鏡鎖の部屋――

〔鏡鎖〕

「……………」

シュタツ！

鏡鎖は男を留置場へ連れて行き、自室に戻ってきた

コンコン

するとタイミング良く、部屋の扉がノックされた

〔鏡鎖〕

「……………夏侯淵か……………いいぞ」

ガチャ

〔???〕

「相変わらず、こちらが名乗る前に良く分かるな」

扉をあけ、入ってきた人物は青い髪にスレンダーな女性……………魏の将、
夏侯淵である

〔夏侯淵〕

「……………あと、私は真名で呼んで良いと言ったはずだが？」

〔鏡鎖〕

「……すまん、癖でな……」

少し、すまなそうな顔をして鏡鎖が答えた

〔鏡鎖〕

「ところでなにか用か？…かこ……んんっ！……秋蘭…」

〔秋蘭〕

「うむ……華琳様がお呼びだ。直ぐに部屋に来るようと言うことだ。」

〔鏡鎖〕

「華琳様が！？分かった…直ぐに行こう…」

すると鏡鎖は部屋から出ようとしたが、秋蘭が呼び止めた

〔秋蘭〕

「……くれぐれも姉者に見つからないようにな……」

〔鏡鎖〕

「…心得ている…心配するな…」

シュッ！

そう言うと、鏡鎖はその場から消え、自分の部屋を後にした

………

気付いている人も居ると思うが、鏡鎖の家は魏の城——霸王曹操の住む城の一室に住んでいる。

無論、鏡鎖も兵士、しかも将で政務等をこなす（だが、ほとんどが夏侯惇がほったらかした仕事）。

だが、鏡鎖だけでも一つ、特別の仕事がある。

それは普段“殺事^{しごと}”と言っており、その内容は魏の裏で悪行を働かせる組織の逮捕、解体、そして“処分”……。

そして、この仕事を効率良くするために鏡鎖は“魏の影将”として、魏の将だが表には出ない……

故に、鏡鎖を知っている者は先程の夏侯淵こと秋蘭と、曹操しか知らない——

だが、曹操は影ばかりではこの魏の事はわからないと言うことで、

鏡鎖に表の仕事として警備隊長の職に就かせた。

鏡鎖は始めは納得いかなかったが、捕まえた犯罪者や“処分”の時に良いという事で、表は警備の仕事を、裏では魏の殺事をしている。

閑話休題

………

………

………

………

シュッ！

此処は、霸王曹操の部屋。部屋の前に現れた鏡鎖は辺りを見回す…

幸い、誰もいないようだ

いないのを確認した鏡鎖は、部屋の扉をノックした

コンコン

「???」

「誰？」

凜とした声が聞こえてきた

〔鏡鎖〕

「鏡鎖で御座います、華琳様」

「???」

「入りなさい」

〔鏡鎖〕

「失礼します」

ガチャ

其処には、机に向かって政務をこなす魏の霸王——曹操がいた——

〔華琳〕

「流石に早いわね、鏡鎖。」

〔鏡鎖〕

「お仕事中でしたら出直しますが？」

〔華琳〕

「いえ、結構よ。そろそろ休憩にしようと思っていたところだから……そもそも私が呼び出したのだから、余計なお世話よ」

〔鏡鎖〕

「すいません…華琳様…」

〔華琳〕

「ふふっ…まあいいわ……それで早速本題に入らせてもらおうわ」

そう言うと華琳は、備え付けられている椅子とテーブルの方に移動し椅子に座り、鏡鎖も椅子とテーブルの方に移動し華琳と反対側の椅子に座った。

〔華琳〕

「…この頃、行方不明者が絶えないのは知っているわね？」

鏡鎖は頷く

〔華琳〕

「実は、その事件に比例して、全身鎧に覆われた人間、を見たと言う人間が後を絶たないのよ」

〔鏡鎖〕

「!!!!」

〔華琳〕

「問題は其処ではないわ…その見たと言う人間たちも、翌日に行方不明になっているのよ……………」

〔鏡鎖〕

「……………」

〔華琳〕

「其処でああなたに“殺事”をして貰いたいんだけど……………」

鏡鎖は暫く黙っていたが、程なくして…

〔鏡鎖〕

「……………分かりました…しかし、生かすのは難しいと思いますが…

…」

〔華琳〕

「構わないわ。最悪、殺しても良しとしましょう…その鎧の人間は気になるけど、また行方不明者が増えたら意味がないわ…鏡鎖、殺すのなら確実にやりなさい、良いわね？」

〔鏡鎖〕

「はい、華琳様…」

〔華琳〕

「じゃあ用件も済んだことだし、あなたも仕事に戻りなさい…それとも、閨の相手をしてくれるのかしら？」

いやらしい視線が鏡鎖を見つめる

鏡鎖は少し苦笑しながら

〔鏡鎖〕

「ご冗談を…私では華琳様を満足させられませんよ…」

〔華琳〕

「ふふっ…可愛げが無いわね♪…ま、からかうのはこちらへんにしときましよう」

華琳は口元をゆるませて言った

〔華琳〕

「……じゃあ例の件、頼んだわよ鏡鎖」

〔鏡鎖〕

「はい……では失礼いたします」

ガチャ……………パタン

〔鏡鎖〕

「……………」

部屋を出た後、鏡鎖は考え事をして廊下を歩いていた

〔鏡鎖〕

（…全身、鎧の人間に行方不明者……やはり……）

かなり深く考え込んでいて、周りの事を考えていなかった……

〔???〕

「誰だ!! 貴様!」

〔鏡鎖〕

「!!!!」

時すでに遅し……声のした方向を見ると、黒い長い髪に、赤い服……そしてその手には巨大な剣を持って向かって来る一人の女性がいた……その女性こそ魏武の大剣、夏侯惇だった……

〔鏡鎖〕

（し……しまった……考えていたらここが城ということ忘れていた……）

鏡鎖は奥歯を噛み締めながら向かって来る夏侯惇を見ていた
今から逃げるとかえって怪しまれるからだ

すると夏侯惇が鏡鎖の前に立ちふさがった

〔夏侯惇〕

「貴様……聞いているのか……誰だと聞いている」

〔鏡鎖〕

（仕方ない……）

「はっ……！私めは警備隊長の鏡鎖と言うものです……！」

背筋を伸ばし、夏侯惇にむかって敬礼をする

〔夏侯惇〕

「警備隊長？何故警備隊長隊長がこんな所にいる？」

〔鏡鎖〕

「はっ！！警備のことについて用事がありましたので」

〔夏侯惇〕

「そうか…だが何故こんな城の奥まで来ているのだ？報告ならば文官に言えば良いだろう？」

〔鏡鎖〕

（くっ……痛いところを…何故こういう時だけ鋭いんだコイツ……）

鏡鎖は心の中で少し焦っていた……夏侯惇は馬鹿で有名だ…だから撒くのも簡単だと思っていたからだ……

〔鏡鎖〕

「それは……」

〔秋蘭〕

「姉者？こんな所で何をしているのだ？」

するとタイミングよく秋蘭が話しかけてきた

〔夏侯惇〕

「ん？ おお、秋蘭か、いやこの男が城の中を物色しておったのでな、問い詰めている所だ」

〔鏡鎖〕

（人聞きの悪い事を言うな！…）

〔秋蘭〕

「そうか……ならばその役、私に譲って貰わないか？」

〔夏侯惇〕

「？ 何故だ秋蘭？」

〔秋蘭〕

「私は丁度華琳様に用事があるからな、それに姉者は今から兵の調練があるのでなかったか？」

〔夏侯惇〕

「おお、そうだったそうだった、なら秋蘭任せろぞ！」

〔秋蘭〕

「ああ、じゃあな姉者。」

〔夏侯惇〕

「おう！じゃあな秋蘭！！」

ダッダッダ……

夏侯惇が見えなくなると…

〔鏡鎖〕

「……有難う、助かった秋蘭」

〔秋蘭〕

「まあな…だがあれほど注意しろと言っただろ？」

〔鏡鎖〕

「すまん…考え事をしていた……」

〔秋蘭〕

「まったく……ふふっ」

〔鏡鎖〕

「？何故笑う？」

〔秋蘭〕

「いや、なんでもないさ……なら、今度は気をつけろよ？そんなに

都合よく私がいるわけではないからな」

〔鏡鎖〕

「……恩に着る……じゃあな秋蘭……」

シュン！

鏡鎖は一瞬でその場から立ち去った……

〔秋蘭〕

「ふっ……お互い様さ……」

鏡鎖が消えたあと、1人呟くとスタスタと秋蘭もその場から立ち去った……

……

……

……

……

……

——その夜——

——漆黒の布の上にまるで宝石を散りばめたような空——

——そして輝く星の中で一際目立つ大きな三日月——

シンと静まり返った魏の街——

「? ? ? ?」

「……………」

そこに怪しい人の影——

「? ? ? ?」

「……………」

その影はある家の前でジッとしており、
ニヤリと少し笑うと、その場を立ち去ろうとした——が

ガタン!!

「? ? ? ?」

「!! ! !」

影が立っていた場所のすぐ近くのゴミ箱が倒れたのだ

「? ? ? ?」

「……………」

その場で固まる影——すると、

〔猫〕

「ニャア」

倒れた場所から猫が出てきて、ホッとした顔する影——

そして、そそくさとその場を逃げるように影は去っていった——

……………」

……………」

……………」

……………」

…

——翌日——

鏡鎖は街に来て警備の仕事、見回りをしていた

昨日は溜まりに溜まった仕事（全部夏侯惇のほったらかした仕事）
をしており、調査どころではなかった為、見回りをしながら調査する
ことにしたのだ

〔鏡鎖〕

「…………ふ……………」

〔兵士〕

「隊長？大丈夫ですか？」

一緒に見回っている兵士が尋ねてきた

〔鏡鎖〕

「ん？……大丈夫だが？」

〔兵士〕

「いえ…それならいいのですが……どうも隊長がやつれて見えるのですが…」

それもそうだ…

徹夜で仕事をしていたのだから…

〔鏡鎖〕

「気にするな…疲れが溜まっているだけだ」

〔兵士〕

「そうですか…」

〔鏡鎖〕

「そんな事より今は見回り中だ」

〔兵士〕

「は、は！！」

見回りを再開すると：

ドガッ！

〔不良1〕

「あ？お前何処見て歩いてんだ？」

〔子細い青年〕

「え…」

〔不良2〕

「おうおう！何兄貴に当たってんだ？謝れや！」

〔子細い青年〕

「いや…そっちからぶつかって……………」

〔不良2〕

「なんやと？兄貴を“鉄威”と知って言っとなるんか？」

〔子細い青年〕

「そ、そそんなつもりは」

〔鉄威〕

「なあ？お前…謝れって言うてんのがわかんねえのか！！」

ドガッ！！ゴスッ！！ボコッ！！

〔子細い青年〕

「グハッ！！……や、止め……」

鉄威と呼ばれた男と、仲間だと思われる男二人で青年に暴力し始めた

〔鏡鎖〕

「！？止めるぞ！」

〔兵士〕

「はっ！」

すかさず鏡鎖達が止めに入る

〔鉄威〕

「おらっ！」

ドガッ！

〔連れの男〕

「！？ 兄貴、警備兵ですぜ」

近づいて来る鏡鎖達に気づいた連れの男が鉄威に呼びかける

〔鉄威〕

「なに！？……ふん！ ずらかるぞ！！」

タッタッタ…

〔兵士〕

「あ！ おい待て！」

〔鏡鎖〕

「無駄だ、今追っても追いつけない」

追いかけようとする兵士を止め、鏡鎖は青年に声をかけようとしたが……

〔鏡鎖〕

（！！！いない！？どこだ！！）

既に青年の姿はなく、辺りを見回したが人が多く、発見出来なかった

〔兵士〕

「隊長…やはり何処にもいませんね」

〔鏡鎖〕

「そうだな…しかしあの鉄威とか言う不良……」

〔兵士〕

「ああ…ここ最近顔を出したチンピラの頭ですね…なんでもここ数日でこの街の半分の不良を従えているとか…」

〔鏡鎖〕

「ほう…よほど人を集めるのが上手いようだな……」

鏡鎖も鉄威の名は“殺事”の時に何度か目にしたことがある
大した悪行もはたらいっていないのでほっといたのだが…

〔兵士〕

「でも…ここ最近、不良達が危なくなっているらしいんですね」

〔鏡鎖〕

「?」どう言うことだ?」

〔兵士〕

「あれ? 隊長は気付いてらっしゃらなかったのですか? ここ最近の行方不明者: 殆どが“不良”ですよ?」

〔鏡鎖〕

「!?!」

鏡鎖は華琳から行方不明者のリストは事前に貰っていたが、昨日の仕事で読むのを忘れていた

〔鏡鎖〕

（そうか...じゃあ今回は不良に恨みをもっている者か.....なら...
...）

〔兵士〕

「? 隊長? 本当に大丈夫ですか?」

〔鏡鎖〕

「え...あ、大丈夫だ...其れよりよく気付いたな」

〔兵士〕

「ああ…それはこの前まで自分、報告担当だったので」

〔鏡鎖〕

「なる程…」

それなら納得だ

報告担当とは民からの苦情や要望を文字通り文官などに報告する係だ

〔鏡鎖〕

「よし……じゃあ見回りを再開するぞ」

スタスタ

〔兵士〕

「あ…ま、待って下さい」

そして鏡鎖は見回りを再開し、今日1日の“仕事”を終わらした――

……

……

……

……

…
…

——数日後の夜——

——鉄威達が集まる家——

〔鉄威〕

「わーはっは!!」

ワイワイガヤガヤ…

鉄威達、不良達が拠点としている建物では、今酒盛りの真っ最中だった

〔灼する不良〕

「いやゝそれにしても兄貴はすごいッスよ。たった数週間でこの街の不良共をまとめ上げるんですから」

鉄威に灼をする不良の1人が言った

中央を陣取る鉄威が

〔鉄威〕

「わっはっは!! ま、俺にかかればこんな事は朝飯前さ……はっはっは!!」

〔太った不良〕

「でも……最近、“不良狩り”みたいなものがあるみたいなんだ……こ、怖いんだな」

不良達の中で一番太った男が言った

〔鉄威〕

「なんだ? お前、ビビってんのか?」

鋭い眼光で太った男を睨みつける

〔太った男〕

「そ、そそそんなことは……」

顔をブルブルと横に振ってタジタジになる太った男

〔鉄威〕

「ふん！……まあいい……なんならその犯人とやら捕まえて、ヒイヒイ命ごいするまで可愛がってやるぜ…ガッハッハッハ…！」

〔不良〕

「さすが兄貴…！」

ワッハッハと皆が笑う

すると…

ガタッ！…

〔不良〕

「ん？」

ガタガタガタ…！！

〔不良〕

「な、ななななんだ!？」

入り口の近くに居た不良が、突如、物凄い音で揺れている戸に驚いて大きな声を出した

その声で笑い声が止み、皆、入り口の方へと目をやる

〔鉄威〕

「おい!どうした!？」

物凄く不機嫌そうに怒鳴りながら質問する鉄威

〔不良〕

「い、いや…と、扉が……」

〔鉄威〕

「扉あゝ?扉がどうし——」

するとまた…

ガタガタガタガタガタ！！

〔鉄威&p;不良達〕

「「「！！！！」」」

さっきより、大きな音がして扉が不自然に動く…

風にしては窓は何ともないし、動物かするにしたって明らかに無理だ…

人によるものであることは明らかだった

〔不良1〕

「お、おい、お前見に行けよ」

〔不良2〕

「な、なんでだよ…お、お前がいけよ」

ザワザワ…

不良達がざわつき始め、確認させる役を押し付けあっている

〔鉄威〕

「おい！！てめえら何、ちんたらやってんだ！！さっさと確認しにいかねえか！！」

シーン…

鉄威の一言に皆、黙り込むが誰一人として確認しにいかうとしない

〔鉄威〕

「…分かった…お前らがそうなら、俺が行ってやろうじゃねえか！！」

ドン！

ビクッ！！！！

勢い良い立った鉄威に皆、体を震わせた

ドスドス！

鉄威が扉の前まで歩いていく

〔鉄威〕

「……………」

鉄威が一旦止まると

ガラッ！

思いつき戸を引いた

〔鉄威〕

「？」

其処には誰もいなかったが、代わりに《あるもの》があった

それは…

〔鉄威〕

「……………鏡？」

そう、其処には巨大な鏡があった

〔鉄威〕

「はっ！……………なんだ、ただの鏡じゃねえか…こんなもん置いたか

らってなにが——」

鉄威が鏡を割ろうとしたその時——

「ボブキャンサー」

「キシヤアア——！！！！」

「鉄威」

「！？！！！！な、なんだコイツ！！」

突如、鉄威の前にある鏡の中に、黄土色の体に2つのハサミが手の代わりについて、2本足で立ち、顔はカニの怪物——ミラーモンスター——のボルキャンサーが現れた！！

「ボルキャンサー」

「キシヤアア！」

ヌッ！

ガシッ！！

ズルズル……

〔鉄威〕

「！！！や、止めろ！！」

ボルキャンサーの鋏が鏡の中から出てきて、鏡の前にいた鉄威を掴むと、そのまま鏡の中へと引きずり込もうとする

必死にもがく鉄威だが、ボルキャンサーの恐るべき力に叶う筈もなく、じわじわと引きずられている

〔鉄威〕

「お、おおお前ら！！俺を助けやがれ！！」

鉄威は仲間助けを求めたが、既に他の不良達は逃げ去っていた…

〔鉄威〕

「う……うわああああ！！」

鉄威は絶望の叫び声を上げたその時

シュッ！

ザクッ！ピシッ！

「ボルキャンサー」

「ギ！？……………」

何処からか投げられた《クナイ》が鏡に突き刺さり、其処からヒビが入った

驚いたボルキャンサーは思わず鉄威を離し、手を引っ込めてしまった
解放された鉄威は一目散に逃げ去った

「ボルキャンサー」

「ギギーー！！」

ボルキャンサーは目標物を逃がした事により、怒ってミラーワールドから飛び出してきた

すると、

シュツ！

カンカン

またクナイが何本かボルキャンサーに投げられたが、ボルキャンサーの硬い甲羅に阻まれ大したダメージになっていない

「ボルキャンサー」

「ギギーー！！」

ボブキャンサーは更に逆上し、手当たり次第攻撃しそうになった

「???」

「……………っ！」

ドガッ！

「ボルキャンサー」

「ギ？……………」

突如背後から蹴りを喰らったボルキャンサーは一瞬よろめく、が直ぐに大勢を立て直し、蹴った犯人を見ようと後ろをみたが、今度は振り向いた瞬間に顔面に蹴りを入れられた

「ボルキャンサー」

「キイイイ……キシヤアアー!!」

怒りが頂点に達したボルキャンサーは蹴ったものに襲いかかろうとした

「???」

「まて！」

すると建物の影から現れたある男の声で止まった

その男とは、なんと先日鉄威に暴行を受けていたあの青年だった

「青年」

「……まったく…僕の“掃除”の邪魔はしないで欲しいですね…あ

なた…誰ですか？」

青年はボルキヤンサーを攻撃した人間に向かって質問する

「???」

「……やはりお前か…最近、不良達の行方不明の犯人は」

暗闇の中から現れた男は、黒い服を纏い、腰に日本刀を挿した――
――鏡鎖であった

〔青年〕

「なんです？あなた……僕の掃除を邪魔して……ゴミがどっかにい
っちゃったじゃないですか……」

そういうと青年は、オレンジ色の箱のようなものを前に突き出した
するとどこからともなく青年の腰にベルトが装着された

〔青年〕

「本当は使いたくありませんでしたけど……秘密を知られては仕方
ありません……あなた…死んでください……変身！」

青年はそう言うと、オレンジ色の箱をベルトに差し込んだ

キュアアアー

シャキン！！

すると青年から眩く光り、青年はオレンジ色の甲冑を纏い、顔を覆うオレンジの仮面をつけた——《仮面ライダーシザース》に変身した

「シザース」

「では……さようなら……」

ダッ！

シザースは左手に装着されてある、シザースパイザーで鏡鎖に襲いかかった！

ガシイイイイン！！

刃物と刃物がこすれる音がした

〔シザース〕

「!？」

見ると、鏡鎖は腰に挿していた刀を抜いて、シザースの攻撃を防いでいた

鏡鎖の刀は、真っ黒な刀身に龍の鱗を思わせる装飾をした、正に黒龍のような刀——黒龍こくりゅうげつじん月刃

〔シザース〕

「そんな細い剣で防いだところでなんになるのですか！そんなものっ！！」

グツと体重を掛けて刀を折りにいこうとしたが、ビクともしない…

それどころか、鏡鎖は何ともないように平然としている

〔鏡鎖〕

「…………お前では、俺を倒すことなど出来ない……」

「シザース」

「クッ！……世迷い言を！直ぐそんな事が言えないようにしてあげますよ！！」

ガシャッ！

シュンッ！

シザースは左手のシザースバイザーを開くと、ベルトに装着しているカードデッキの中からカードを一枚引き、シザースバイザーにそのカードを入れた

ガシャッ！

『アドベント』

男の声の電子音が鳴ると、

「ボルキャンサー」

「キュアアーーーー！！」

ボルキャンサーが別方向から襲いかかってきた

〔鏡鎖〕

「……………」

ドン！

〔シザース〕

「！…くっ…」

鏡鎖はとっさにシザースを押しきり、後方へ10mぐらい離れボルキャンサーの攻撃を避けた

〔シザース〕

「ふふっ……………そうやったって一緒ですよ……………変身も出来ないあなたに勝ち目なんて——」

〔鏡鎖〕

「それは違うな…」

シザースが最後まで言う前に、鏡鎖が口を出した

〔シザース〕

「なんですか?」

〔鏡鎖〕

「俺は一度も変身が出来ないとは言っていない……それに……」

鏡鎖は一拍あけると

〔鏡鎖〕

「……言った筈だ……お前では俺に勝てない……と……」

すると鏡鎖はポケット（この世界にそんなもんあるのか?というツッコミは無しで）から“藍色の蠍の紋章が描かれたカードデッキ”を取り出した

〔シザース〕

「なっ……」

それを見たシザースは言葉を失った

〔鏡鎖〕

「さあ……魏の“影”を見せてやる」

バツ！

鏡鎖がカードデッキを前に突き出すと、何処からともなくVバックルが現れ、自動的に鏡鎖の腰に着けられた

〔鏡鎖〕

「変身！！」

ガチャッ！

キュイイイイインー

鏡鎖が腰のVバックルにカードデッキを差し込むと、眩い光が辺りを明るく包んだ

〔? ? ? ?〕

「……………」

そして、藍色と黒の甲冑を身に纏い、蠍を思わせる顔を覆い尽くす
仮面をした鏡鎖が立っていた

〔シザース〕

「な……なんだ！あんたは！？」

戸惑うシザースに鏡鎖は静かに言う

〔ヴァイス〕

「…………俺の名は…………“仮面ライダーヴァイス”…………」

〔シザース〕

「ヴァイス…………ですって！？…………此処には僕以外のライダーなど居
ないはず…………」

〔ヴァイス〕

「的が外れたみたいだな…………お前はもう…………終わりだ…………」

〔シザース〕

「くっ…………クソオオオオオオ！！」

ガチャッ！

『ストライクベント』

キュイーン！

シザースはシーザスバイザーにカードを差し込み、カニの鋏のような武器：シザースピンチを召喚し、右手に装備した

〔シザース〕

「うおおおお！！」

そしてヴァイスに向かって攻撃を仕掛けてきた

だが

〔ヴァイス〕

「……………」

シュン！

ガシィィィン！！

〔シザース〕

「！？」

ヴァイスの持っていた黒龍月刃が一瞬にして、藍色の刀身の“キラバイザー”に変わり、ヴァイスはキラバイザーでシザースの攻撃をらくらく受け止めた

〔シザース〕

「クッ……ならば……」

ダッ！

シザースはヴァイスと間合いよりも遠く下がると

〔シザース〕

「いけ！！」

「ボルキャンサー」

「キシヤアアー！！」

シザースの合図にボルキャンサーはヴァイスに向かって突進してきた
そしてその背後からシザースが向かってくる

だが、ここでもヴァイスは慌てず

ガチャッ！

シュン

キラーバイザーの刀身と持ち手の間の挿入口を開き、カードデッキ
からカードを取り、キラーバイザーに装填した

ガチャッ！

『アドベント』

「キラースコルド」

「シャアアアーーーー！！！！」

「シザース」

「！？」

ヴァイスのアドベントにより、5 mもの巨大な蠍…ヴァイスの契約モンスター“キラースコルド”が現れた

「キラースコルド」

「シャアアア！」

シュン！

ドガッ！！

「ボルキャンサー」

「ギッ…」

ヒュン！

「シザース」

「！？……ぐわああああ！！」

ズサササー……

キラースコルドの巨大な尻尾がボルキャンサーをぶっ飛ばし、その後ろにいたシザースも巻き添えを喰らいふっ飛ばされた

「シザース」

「くっ！……くそ！さっさとどけ！」

ガンッ！

上に乗っていたボルキャンサーを押しわけ、シザースが立ち上がる
そしてヴァイスに向き直ると

〔シザース〕

「なぜだ！？何故分らない？僕はこの街の“汚れ”を綺麗にして
いるだけなんだぞ！？それを……何故！」

シザースはヴァイスに訴えかける

〔ヴァイス〕

「……………」

ヴァイスは何も答えない

〔シザース〕

「あんな社会のクズどもに何があると言うんだよ！？……あんな奴ら
いなくたって——」

〔ヴァイス〕

「それでも…」

ようやくヴァイスが口をだした

〔ヴァイス〕

「それでもこの街の住人という事は変わらない……………俺は……………その住人を脅かす、お前の方が社会のクズだと思うぞ」

〔シザース〕

「っ！……………」

シザースはヴァイスの言葉に声を詰まらせる

〔シザース〕

「……………それでも…」

〔シザース〕

「それでも僕は正しいんだー！！！」

ガチャッ！

『ファイナルベント』

〔シザース〕

「ウオオオオオオオ！！！」

バツ！

シザースは背後に立ったボルキャンサーに向かってそのまま後ろにジャンプし、それをボルキャンサーが自らの腕でキャッチし、シザースを腕の力で上空に高く上げた

〔シザース〕

「ウオオオオオオオ！！！！！！！」

シザースはそのまま上空でヴァイスに向かって空中前転をし体当たりをする、シザースのファイナルベント“シザースアタック”を繰り出した

〔鏡鎖〕

「！！！！」

ドカーン！！

猛烈な爆発音がして辺りが煙に包まれる

〔シザース〕

「ぐわっ！！」

シザースは何かにはね返されたように煙の中から出てきた

〔シザース〕

「な……なぜ……」

自分が何故はね返されたのかが分からず、真っ直ぐ煙の中心の方を見る

サァー

煙が風で去っていく

「シザース」

「！！！！」

見ると、煙の中心にあったのはヴァイスではなく、巨大な盾……いや、ヴァイスの契約モンスター……キラースコルドの体だけが空中浮遊をしていた

バンッ！

すると、キラースコルドの体がバラバラのパーツに分解し、それぞれのパーツごとに空中に浮遊した

「ヴァイス」

「……………」

ヴァイスはキラースコルドの体の後ろにいた

ヴァイスはシザースアタックを喰らう前に、ガードベント“スコルドディフェンス”を発動し、シザースアタックを防いでいた

「シザース」

「そん……な……」

シザースは絶望の声をあげる

「ヴァイス」

「……さあ……」

ガチャッ！

シュッ！

「シザース」

「ヒッ！」

「ヴァイス」

「終わりにしよう……」

シュ

ガチャッ！

『ファイナルベント』

すると、空中浮遊していたキラースコルドの体が突然、シザースに襲いかかった！

シュッ！

〔シザース〕

「ぐわっ！」

キラースコルドの体によって上空に打ち上げられたシザースは…

ドカドカドカ！！

〔シザース〕

「ぐ……………が……………は！……………」

空中で次々とキラースコルドの体がシザースを攻撃し、

シュン！

〔ヴァイス〕

「……………」

すると、キラースコルドの体の一部に乗ってヴァイスがシザースの前に現れた

〔ヴァイス〕

「……………死をもって、償え…」

〔シザース〕

「！！！！ま…まて——」

ヴァイスはキラバイザーを構えシザースを斬りつけた

ヴァイスのファイナルベント“デス・ザ・エンド”が決まった

シュン！

〔シザース〕

「ぐわあああああ！！！」

ドガッ！

ヴァイスの一撃により、シザースは地面に叩きつけられた

〔シザース〕

「クッ！」

その時

パリーン！

〔シザース〕

「！！！！！」

シザースのカードデッキが“砕け散った”

バラバラ

それによって、シザースの変身が解け、ボルキャンサーとの契約が解除された

ヌッ

すると、ボルキャンサーが変身の解けた青年の後ろに現れ

ガシッ！

〔青年〕

「！や…やめ——」

青年を掴むと

〔青年〕

「うわあああああ！！」

シュン！

ボルキャンサーは青年を連れてミラーワールドへと入っていった……

その一部始終を上空で見ていたヴァイスこと鏡鎖は…

〔鏡鎖〕

「…………哀れ……最後は自分の力に吞まれたか……」

そして鏡鎖はその場から立ち去った――

……………

……………

……………

……………

……………

……

―翌日の朝―

〔華琳〕

「……………成る程ね…」

鏡鎖は華琳の部屋で、昨日の報告をしていた

〔華琳〕

「……………やはり今回の犯人はあなたと同じ“力”を使っていたようね……………」

〔鏡鎖〕

「……………はい……………しかし……………それ程の使い手ではありませんでした…」

〔華琳〕

「そう……………まあいいわ　じゃあもう戻りなさい……………あと、今日は休みをとっていいわ。今日は体を休めなさい……………ここ数日、寝てないのでしょう?」

鏡鎖はここ数日、徹夜で鉄威の集まる家をはっていたのだ

〔鏡鎖〕

「はい…では、失礼します」

ギィ…ガチャン

〔鏡鎖〕

「……………」

華琳の部屋を出て、鏡鎖は暫く天井を見上げていた

〔鏡鎖〕

「……………ふっ…」

何かを決心したように少しだけ笑うと

シュッ！

鏡鎖はまた仕事へと戻るのだった…

魏✓第壹席 《鏡鎖 影の魏將軍》（後書き）

ふう…やつと終わった／＼（へーへ）／

〔宏太〕

「つてなげーよ!! おせーよ!!…これで読者の人が減ったらどうすんだよ!」

むっちゃ悲しいです…

〔宏太〕

「だろ? だから今度は――」

次は呉✓にいきますんで

〔宏太〕

「はやっ! てかまだ最後までいってねえし!」

はいはい…

では次回は？

〔宏太〕

「って、おおい！！」

呉の街の中で強盗事件が大量発生！！

そして虎閃はその犯人を捕まえるように命令されてしまう
のんびりと調査をしていたら……

呉√第壱席

《虎閃 虎の魂》

〔虎閃〕

「お楽しみに！」

あと、ガイド小説の鏡鎖の設定…仮面ライダーヴァイスの設定とデ
ィバイドの設定も同時更新致しましたので、そちらも是非、読んで
みて下さい m (_) m

〔鏡鎖〕

「…魏√の感想、質問も待っている…」

〔虎閃〕

「悪を断ち切り、世界を救え！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9630i/>

真・恋姫†無双～乙女繚乱☆平成仮面ライダーと三国志演義～

2010年10月18日04時45分発行